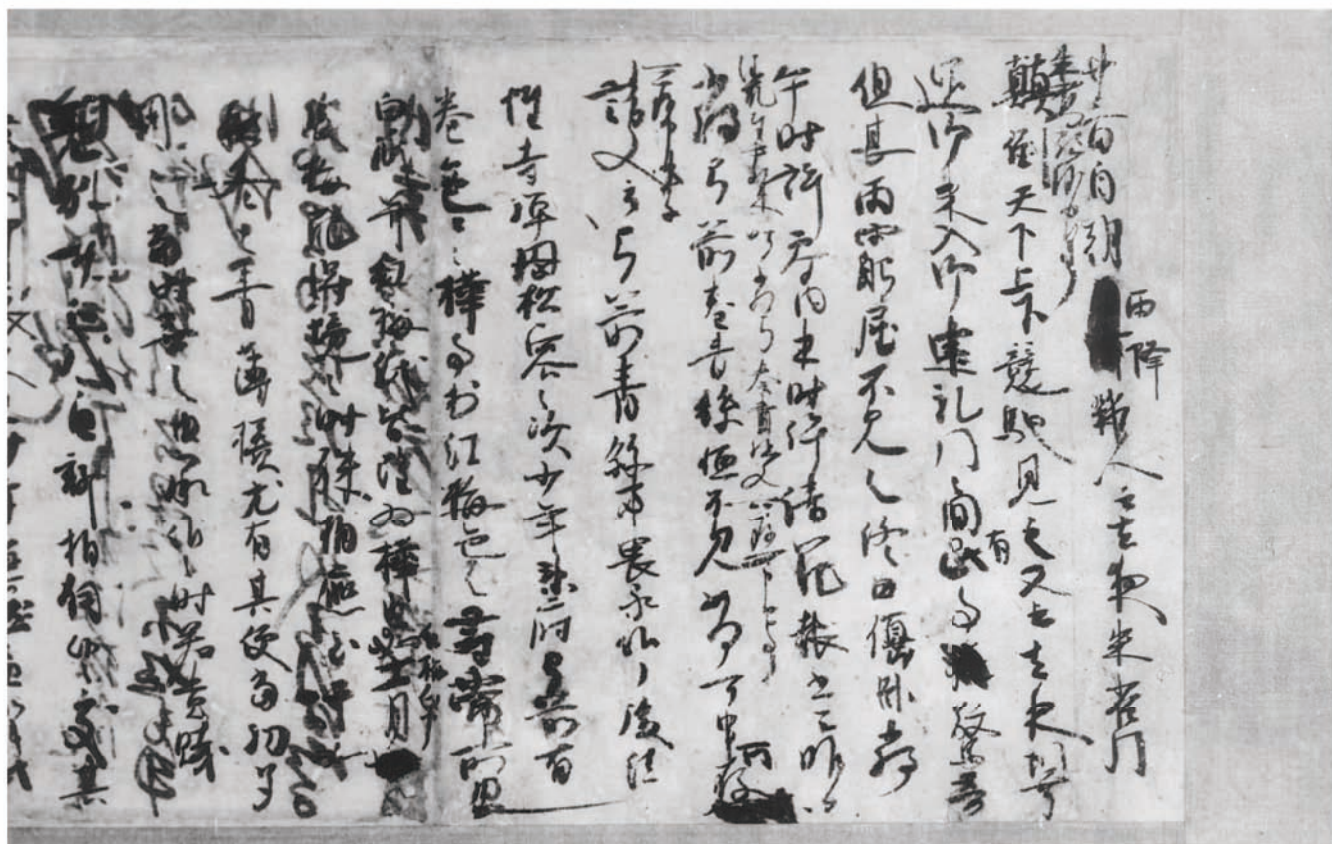


# ふみくら

No. 78  
2010. 3. 15

早稲田大学図書館報



『明月記』断簡 (本文13p参照)

## 目次

「Waseda Next 125」と早稲田大学図書館の戦略的課題について・・・2  
中元 誠 (図書館事務部長)

「アカデミック・リエゾン」と利用者支援課の発足……………6  
金子 昌嗣 (図書館事務副部長兼利用者支援課長)

〈事例報告①〉  
政治経済学部の総合基礎演習αへの授業支援……………8  
仁上 園子 (高田早苗記念研究図書館担当課長)

〈事例報告②〉  
文化構想学部・文学部の基礎演習への授業支援……………9  
中村 里弥子 (戸山図書館担当課長)

「スチューデント・コモンズ」としての学習コーナーの新設……………10  
荘司 雅之 (図書館事務副部長兼総務課長)

新収の自筆本『明月記』断簡……………13  
兼築 信行 (文学学術院教授)

元禄十二年十月中旬 学思堂宛去来書簡……………16  
宮脇 真彦 (教育・総合科学学術院教授)

中央図書館ハンゲル図書「族譜コレクション」について……………18  
高木 理久夫 (資料管理課)・工藤 美和子 (佃キャンパス)

新収資料 丸岡明「三田派・早稲田派一文壇早慶戦」……………24  
村田 聡史 (資料管理課)

展覧会報告 2008年11月～2009年12月……………26  
図書館展示委員会

浙江工商大学に「早稲田大学文庫」設置……………29  
藤原 秀之 (資料管理課長)

知られざる図書館員 三木武吉……………30  
藤原 秀之 (資料管理課長)

電子資料の導入状況……………32  
今村 昭一 (図書館調査役)

図書館ホームページ (日・英) のリニューアル……………34  
外山 智信 (情報管理課)

オンライン紹介状申し込みのサービス……………35  
御園 和之 (利用者支援課)

図書館だより……………36

〈所属名は原稿執筆時のもの〉

# 「Waseda Next 125」と早稲田大学図書館の戦略的課題について

中元 誠（図書館事務部長）

## はじめに

本学は、2007年10月、創立125周年を迎えた。創立125周年を迎えるにあたり、同年4月、総長、理事会より図書館長に対し「21世紀の教育研究グランドデザインの達成内容と今後の検討課題」が提示された。ここでは、創立125周年を迎える2007年度までの達成目標を述べた「グランドデザイン」を総括するとともに今後10年間の達成目標にかかわる理事会の基本的な考え方が説明され、これとの関係において今後の総合大学としての図書館のあり方についての基本的な考え方が諮問された。

図書館においては、図書館長の諮問機関である図書館協議会において意見をとりまとめ、7月の「中間報告」をはさんで2008年2月に『「Waseda Next 125」と図書館の戦略的課題』と題した最終的な「答申書」を総長に提出した。この間、10月には『「Waseda Next 125」中間報告に関する理事会の基本的な考え方』が提示され12月の全学の教職員に対する説明会をはじめとしてさまざまなチャンネルで意見聴取がすすめられた。図書館においても答申をとりまとめるにあたり、図書館職員をはじめ図書館協議員をつうじて可能なかぎり関連する教職員の意見集約につとめた。

以下では、図書館答申の概要を示し、あわせてこれにもとづく直近の図書館の取り組み（2007～2010年度）について報告する。なお、「Waseda Next 125」については、<http://www.waseda.jp/keiei/next125/index.html>をご参照いただきたい。

## 1. 「Waseda Next 125」と図書館のミッション

図書館は、学術情報基盤の要として、利用者が必要とする図書館情報資源の構築と図書館サービスの充実および学術情報受発信機能の強化を通じて、「Waseda Next 125」が掲げる「早稲田」から「WASEDA」を実現する。

## 2. 「Waseda Next 125」と図書館の戦略的課題

(1) 図書館は「教育の早稲田」を実現するために：

・教育、学習支援に必要とされる情報資源を的確に提供する

・教員、学生による情報資源の利用を積極的に支援、推進する

教員、学生による学術情報資源の有効な活用を積極的に支援し、基盤的教育の充実を図るために、学部、大学院、オープン教育センター、メディアネットワークセンター、遠隔教育センターなどと連携して、全学的な図書館情報リテラシー教育の展開を推進する。特に、入学後の出来るだけ早い機会に、情報や情報手段を分析的・批判的に評価し、主体的に活用できるための基礎的な資質に働きかけていくことが教育分野においては重要であり、「自学自習」には不可欠である。

・学生の「自学自習」を支援し、充実した情報資源の利用を高めるサービスモデルを実現する

・図書館職員の教育現場へのより直接的な参画を実践する

学生の「自学自習」に対応して、全学を対象とした汎用的な図書館情報リテラシー教育に加え、学部、大学院等との連携のもと個別的なニーズに応えるサービスモデルを構築する。また、ここにおいて図書館職員の教育現場へのより直接的な参画をめざす。例えば、本学の充実した学術情報資源をいっそう身近なものとするために、古典籍総合データベースを活用した教材を教員と協働して提供することや、ネットワーク環境下における非来館型の図書館サービスとして、オンラインレファレンスなどの新たな利用者接点サービスを積極的に展開する。

(2) 図書館は「研究の早稲田」を実現するために：

・学術情報資源の収集・提供の充実をはかる

研究者が必要とする学術情報資源をより有効にかつ迅速に収集・提供するためのIT環境・施設的環境の整備や図書関係予算諸制度の見直しを進める。とりわけ、早稲田キャンパスにおける研究支援体制のいっそうの改善・強化を図ることを目的として、高田早苗記念研究図書館（以下高田記念



図書館)を組織的中核とした施設的環境の整備を重点課題とする。

#### ・研究者支援体制を強化する

個々の研究者へのより直接的な研究支援体制を強化し、生み出される研究成果(学位論文・学術論文など)に対して統合的なマネジメント支援機能(学術情報資源の保存と発信の実現など)を有する「リエゾンライブラリアン制度」を確立する。「リエゾンライブラリアン」は、研究、教育へのより直接的な関与を通じて広範な研究教育支援を実現する。また、メディアネットワークセンター、研究推進部、大学出版部などの学内関連諸機関とも緊密な連携をとりながら、図書館に期待される役割、例えば、研究活動に対する組織的なサポート、若手研究者の育成支援、分野横断的プロジェクト管理、研究評価、研究成果の保存・発信および教育への還元などに応えていくための機能・体制を整備する。

(3) 図書館は「開かれた早稲田」を実現するために:

#### ・本学の研究成果、教育資源、文化資源の発信を積極的に支援、推進する

本学が有するあらゆる研究成果、教育資源、文化資源を広く社会に還元するために、文化推進部や文化推進会議との連携のもと、本学の学術情報発信基盤の整備を推進する。また、本学の国内地域連携、さらにアジア太平洋地域を中心とした国際連携における今後の事業展開を念頭に、図書館が果たすべき役割と取り組むべき実践的な課題について検討する。

#### ・開かれた図書館としての適切なサービスのあり方を検討する

校友会等と連携して、校友、在学生家族をはじめとしてより多くの人々に対して、より広範かつ多様な図書館サービスを提供する。また、学生、教職員への利用サービスを中心としたうえで、地域等への適切なサービスのあり方を検討する。

(4) これらを支える「図書館」を実現するために:

- ・財源の安定的な確保をめざし、図書関係予算の効率的な運用体制を確立する
- ・図書館諸制度、システム、IT環境の改善に主体的に取り組む
- ・より高度なスキルと知識を持ち、図書館サー

#### ビスの中核的な役割を実践できる図書館職員の育成と若手研究者との教職協働を実現する

今後の図書館における戦略的諸課題に対応するため、基礎的な調査、研究、開発などに図書館自身が主体的に取り組み、改革に向けた様々な諸施策を提言していくことを目的として総合研究機構などと連携して、図書館内に、研究開発部門を設ける。そこでは、高度な知識とスキルを持ったリエゾンライブラリアンと、若手研究者が協働して、高度情報化社会や知識創造型社会に対応した図書館機能の強化・充実に向けた基礎的な調査、研究を行う。

### 3. 図書館サービスの改善と諸課題

以上に述べた図書館のミッションと戦略的課題への対応に向けて、この間の図書館サービスの改善の概要と取り組むべき当面の諸課題(短期的諸施策:2007~2010年)を概観する。

#### (1) 施設的環境の改善(Library as place)

##### ・図書館利用環境の維持、改善と適切な図書館資料収蔵スペースの再配分、拡充をはかる

図書館による新たな学習支援サービスモデルを施設的に実現するために各キャンパスにおいて学生・コモンズの整備を開始する。学生・コモンズにおいては、学部・学科横断的なグループ学習の場(コモンズ)としての活用に加えて、学生が習得すべき基本的なリテラシー(リーディングスキル、ライティングスキル、情報スキル、プレゼンテーションスキル等)に関するサービスを、そこに常駐する図書館職員ならびに専門の職員(ITセンター・他)から、日常のかつワンストップで提供する。また、各学部との新たな教職協働の具体的な枠組みとして、助教・助手、博士課程大学院生等による研究者の立場からの学習支援サポートも実施する。

高田記念図書館は、早稲田キャンパスの各教員図書室等の蔵書を共同管理すると共に各教員図書室との一体的な運営を基本方針とし、1994年に開館したが、その後、施設的な改善、拡充がほぼ困難な見通しとなっており、同館および各教員図書室における書庫の満杯状況の解消が喫緊の課題となっている。関連する各教員図書室が現在、所蔵する雑誌コレクションを施設的に集約することは、

全学の共同利用の観点からも重要な図書館施策と考える。また、同施設の拡充と並行して、関連する各学院、研究科等とのいっそうの連携、協力体制のもと、大学院学生、研究者を対象としたサービス体制の組織的整備（高田記念図書館の機能強化）についても施設的環境の改善策の一環として取り組んでいく。

## （２）図書館情報資源の充実と拡充（Contents）

### ・教育研究活動を基盤的に支援するために必要な図書館情報資源の構築を推進する

（図書関係予算制度の見直し）

図書館における学術情報の受発信基盤の強化、拡充をさらに推進するためには、財政的な基盤の整備（図書館予算制度の構造的見直しや外部資金調達）をはじめとして、これまでの図書館諸制度（図書館サービスを提供するための制度的な枠組み）の抜本的な見直しは不可避である。この間の電子媒体資料の導入整備状況と学内の研究・教育体制の整備状況を踏まえ、大胆な制度の見直しが必要である。

（データベース、電子ジャーナル導入にかかる図書館コンソーシアムの構築）

本学図書館は、電子ジャーナル、データベース導入にかかわる公私立大学図書館コンソーシアム（Private & Public University Libraries Consortium, PULC）の運営において幹事会事務局として各出版社との交渉の窓口となるなど中心的な役割を果たしてきた。今後とも国内、海外の諸コンソーシアムとの連携強化に向けて積極的な役割を発揮すると共にスケールメリットを活かした電子媒体資料導入のコンソーシアム契約交渉を継続的に実施する。

（古典籍総合データベースの構築）

2005年度より5ヵ年計画により本学中央図書館が所蔵する和漢の古典籍約30万冊を目録所在情報と共に全文を電子化しデータベースとして学内構成員はもとより広く社会に公開することとした。さらに、2008年度までの古典籍総合データベースの構築の実績をふまえ、コンテンツのさらなる充実とあわせて2009年度より本データベースの利用と普及に主眼をおいた新たな事業展開をはかる。その事業展開の一環として、これまでのデータベース構築に主眼をおいた「プロジェクト室」の体制

から、関係する学院、教員との本データベース利用を中軸とした新たな連携の体制へと軸足を移行させる。すなわち、協力教員と図書館職員の連携・協働による同データベースの授業等への活用を2009年度中に具体化する。

（学術機関リポジトリの構築）

2005年度より学内で産み出された教育研究成果を図書館に設置されたリポジトリ（格納庫）に電子媒体により蓄積し広く社会にむけて公開することとした。初年度より、各学院等から刊行されてきた紀要に掲載された学術論文を組織的に電子化し、公開を始め、現在も継続的に事業を展開している。また、新たに開発、ベータ版のリリースを予定している「紀要等編集査読システム」や上で述べた「古典籍総合データベース」の中期的な展開との関連で、教員、研究者とのいっそうの連携をはかる趣旨から、今後の教育研究成果の電子的な蓄積と発信の具体的な展開について組織横断的な検討を進める。また、成果発信の強化の視点からリポジトリ構築と並行して開発されたオンライン・ジャーナル・システム（OJS）の学内関係箇所への普及、実装をすすめる。具体化の手始めとして、図書館刊行物の電子ジャーナル化を2009年度に実施する。また、本システムの実装を前提として、出版企画委員会等とも密接な連携をはかりながら新たな成果発信媒体の創出を図書館のイニシアチブによりすすめる。

## （３）利用者サービスの充実と拡充（Services at anytime, anyplace）

### ・利用者ニーズに対応した図書館サービスの拡充、充実をはかる

（アクセスの改善と利用者接点業務の再構築）

電子ジャーナル、データベース導入の拡大、利用の浸透と歩調をあわせアクセス環境の改善を経営的にすすめてきたが、より一層の利用の拡大をはかることを目的として図書館情報リテラシーの取り組みを強化する必要がある。この間、オンラインチュートリアルコンテンツの拡充、学術情報検索ポータルの見直し、利用者来館型における接点業務の改善や利用者のアクセス環境の多様化、進化に対応した新たな利用者接点業務の創造、再構築などに取り組んでいる。特に利用者の多数を占める学部学生に対する教育・学習支援の観点か

ら、図書館に期待される新たな役割の具現化や各学部において展開される教育研究活動と図書館サービスのより密接な連携の実現を目的とする「学習支援連携委員会」を2008年度に設置した。本委員会では、学部学生に対する学習支援の一層の充実、強化をめざし、各学部に所属する若手研究者と図書館職員の新たな協働体制の構築を念頭におき、各学部と図書館の連携による新たな学習支援の枠組みについて検討を開始している。また、「学習支援連携委員会」の設置とあわせて、ここにおいて検討される各学部との連携を具体的に実現することを目的として利用者接点業務にあたるすべての図書館職員を「アカデミック・リエゾン（学習支援連携担当）」として、その役割を位置付け、関連するメディアネットワークセンター、オープン教育センターや遠隔教育センターなどと密接な連絡調整をはかりながら各学部と連携による企画の策定、実施までの業務にあたることとした。

(開館・開室時間の延長、開館・開室日数の拡大)

各キャンパスや設置箇所の諸事情により、各図書館、図書室、読書室等の開室日数や利用時間は、個別に定められていたが、段階的な見直し、改善を経て、2007年度より中央図書館の開館時間延長(21時→22時)と日曜開館日数を拡大(33日→36日)し、年間の開館日数を310日とした。また、早稲田キャンパスの学部学生読書室においては、WINEネットワーク参入や利用規則の平準化などの成果を踏まえ、貸出、返却を中心としたカウンター業務および書架整備業務などの定型的基盤業務について、各学部と調整を取りながら高田記念図書館を中心とした一体的な業務委託体制を構築し、開室時間および開室日数の拡充、平準化を推進している。また、これら整備の進捗と歩調をあわせながら、今後、サービス業務総体のあり方に関する評価、点検、改善を継続的に実施したい。

#### (4) 図書館組織の再編 (Personnel)

##### ・ 諸課題の実現を担う図書館職員の育成をすすめる

(図書館組織の再編)

図書館業務処理体制の見直しについては、2003年度より図書の発注、受入、目録業務に関わる共通業務の集約化を主軸として「資料管理課」の設置など、図書館組織の再編、業務処理体制の整備

を行ってきた。2005年度では、早稲田キャンパスにおける雑誌管理業務の集約化を視野に入れた見直しを進め、2006年度より雑誌課業務を「資料管理課」に統合した。また、電子媒体による学術情報の受発信基盤の要として、図書館が積極的な役割を担うことを目的に「学術情報課」を「情報管理課」へと改組し、電子媒体による情報基盤整備に一元的、集約的な対応が可能な体制とした。また、上で述べた「アカデミック・リエゾン（学習支援連携担当）」制度の創設と関連して、「総合閲覧課」においては、アカデミック・リエゾン制度の中核を担う部署として全学に焦点をあわせた業務分掌とし、2009年度より「利用者支援課」として再編することとした。

(図書館職員の育成)

図書館の組織再編と共通の諸業務の集約化にあたっては、アウトソーシング手法を導入し、効率化を図りながら一体的な図書館サービスの改善を実現してきた。しかし、一方で、とりわけ基盤業務に関わる業務処理体制にアウトソーシングが浸透していくことに伴い、専任職員業務のコンピテンシーともいべき中核的業務ないし職務の輪郭が現場レベルで不明確になってくるという事態を生じつつある。紙媒体による蔵書の保全、管理、提供にかかわる基盤業務の見直しや継承すべきスキルの検討と併せて、新たな環境に対応する専任職員の中核的業務ないし職務、役割について中・長期的な視点から検討を深め、目指すべき図書館員としての方向性を具現化する必要がある。当面、図書館職員の育成に必要な諸条件（適切な年齢構成や要員数、業務処理体制や図書館組織のあり方等々）や図書館職員に関わる労働市場の動向などについての検討を進め、大学全体の職員人事施策との整合性も勘案しながら、図書館職員に関する諸施策を具体化する。

(『丸善ライブラリーニュース』第7・8合併号(2009.11)からの転載)



## 「アカデミック・リエゾン」と利用者支援課の発足

金子 昌嗣 (図書館事務副部長兼利用者支援課長)

(\*2009年12月より文化推進部事務部長)

2009年4月、図書館組織の改変が行われました。「学習支援連携委員会」の設置を受け、そこでの検討事項の具体化を目的として「アカデミック・リエゾン」制度が発足しました。その中核として、中央図書館の総合閲覧課を改組して「利用者支援課」が設置され、この課のスタッフと、キャンパス図書館、及び各教員図書室等の担当者とを新たに「アカデミック・リエゾン」という呼称で位置づけました。これは、当館が提示した『Waseda Next 125』と図書館運営にかかる諸施策（実行計画）の一つの柱を実現するものといえます（概要は本誌中元氏論考を参照）。

利用者支援課は、従来の総合閲覧課が担っていた中央図書館におけるレファレンス業務を引き続き担当するとともに、最近ではWaseda-net portalからオンラインでの質問も受付けるようになり、その方面も拡充しつつありますが、近年強まっている学習支援への要望にも効果的に対応できるよう新たな役割を与えられました。すなわち、全学に対する図書館情報リテラシーに関わる企画の策定・連絡調整・実施を担うこととなり、大学院規模での演習科目（図書館情報リテラシー関連部分）への全面的協力（後掲報告参照）や、個別の授業やゼミへの支援を通じて、すでに動き始めています。

上述「諸施策（実行計画）」では、利用者支援に関して新たなサービスの展開を構想しています。以下にその概要を示します。

- 利用者が図書館により提供される資料を最大限活用できるための支援
- 学部および修士課程学生の情報スキルの習得支援（リーディング、ライティング、プレゼンテーション等の諸スキルとの関連において）
- 学部・学科横断的な学習環境を支えるプログラムの構築

これらには、図書館の枠を超えた場で、とりわ

け大学院との緊密な連携によって遂行されるべき課題が多く含まれます。図書館においても、利用者支援課のみで自足することは可能でも望ましいことでもなく、大学院の教育研究を直接サポートする使命を担ってきた各キャンパス図書館（早稲田キャンパスにあっては教員図書室等も）との強固な協働があつてはじめて可能となる取り組みといえます。

本学では歴史的に、学部教員図書室のような各箇所の図書室が、箇所それぞれの教育研究に応じたサービスを担ってきました。そこに配置されるスタッフは、バックグラウンドが当該分野と一致するとは限りませんが、業務や研究者との接点を通じて主題関連文献について現場で学ぶことにより、必要な知識・技能が養成されてきたという足跡<sup>そくせき</sup>があります。それらスタッフは、各箇所の教員および学生と良好なコミュニケーションを築き、主題に即したきめ細かなサービスに努めてきました。今日、人員と業務の集約化の中で、各箇所に潤沢なスタッフを配置するのはもはや困難になっていますが、「アカデミック・リエゾン」制度は、各キャンパスおよび中央図書館を核として、教育研究現場に依拠した質の高いサービスを行おうと企図しています。

たとえば、2009年度の基礎演習科目への支援（利用者支援課発足直後の行事）では、文学大学院については戸山図書館と中央図書館、政経大学院については同じく中央と高田記念図書館が主として関わるといのように、図書館側も箇所に応じたサポート体制で臨みました。早くも「アカデミック・リエゾン」が具現化したということができません。

上述の、授業へのいわば機関レベルでの大規模な協力とは別に、個々の教員の求めに応じてクラスやゼミ単位で講習会等を行うことも、重要なサービス機会ととらえています。図書館では従来から、そうしたご希望にはなるべく応じるようにしてきましたが、「アカデミック・リエゾン」制度の

もとで最大限に対応できるように、組織的な連携も含めて体制を強化しつつあります。そうした機会では、教員・学生と図書館スタッフとの距離がさらに短縮されて、図書館やデータベースなどの情報源をより身近に感じていただける点において、この上ない効果があると考えています。今年度はこれまでのところ、戸山、西早稲田キャンパスの各学部、さらには教育、社会科学、国際教養学部、および大学院情報生産システム研究科とファイナンス研究科（それぞれの新入生対象）、またライティングセンター（チューター対象）、などで実施しています。

基礎演習にしても個別支援にしても、終了時に実施するアンケート結果によれば、担当教員からも学生からもかなり好評であることがわかります。図書館や情報検索などについて、知らないことを学びえた喜びが、アンケートの記述回答からうかがえることが少なくありません。もちろん改善すべき点についてのご指摘もあり、アンケートは発奮材料であるとともに貴重な指針ともなっています。

アカデミック・リエゾンの活動で、今後の強化

を考えているのは、情報の探し方に関する文字通りの「情報発信」です。もちろん、講習会はそのためのよい機会となりますが、効果の及ぶのは参加者に限られます。より多くの利用者に対しては、やはりWebを使つての案内が有効であるという考えから、図書館のサイトに「リサーチNAVI」と称する解説記事シリーズを掲載し、それを充実させようとしています。担当者が原案を作成すると（それ自体が重要な勉強の機会）、それについて同僚どうしで活発に意見を出し、改善に努めています。利用者支援課業務のもうひとつの柱であるレファレンスサービスの蓄積の「蔵出し」、という意義もそこには含まれます。

授業への協力とWebを通じての情報発信について述べましたが、アカデミック・リエゾンの活動はこれらに限定されるべきものではありません。学術情報やそれを取り巻く技術、また学習と研究のスタイルが変容していく中で、研究者ならびに学習者をどのように有効に支援できるかが問われ続けるものと考えています。（2009年11月記）

## 〈事例報告①〉

# 政治経済学部総合基礎演習αへの授業支援

仁上 園子（高田早苗記念研究図書館担当課長）

2009年度より政治経済学部で新しく始まった総合基礎演習αの授業に協力させていただいた。この演習は1年生以上を対象に、基礎的な学問の作法を習得することを目的として、半期15回の授業で構成される選択科目で、履修後は総合基礎演習βを受講することができる。1クラスの上限は18名で、クラス数は前期が46（751名）、後期が2（19名）であった。

15回の授業のうち、第2回と第9回を「図書館リテラシー1、2」として図書館の利用方法や情報の収集の仕方を学ばせたいというのが学部側の希望だったので、数度にわたり学部（教務担当教員と事務所担当者）と図書館で授業内容・講師・教室等について打ち合わせを行なった。その結果、まず1回目の授業では実際に中央図書館に足を運んでもらい、AVホールで図書館の概略や図書館システム（WINE）の使い方について講師からパワーポイントを使用しての説明を受けた後、館内ツアーで実際に館内を歩いて慣れてもらうこととした。また2回目の授業では、情報検索の基本的なスキルを身につけさせるため、主としてPC教室で授業を行ない、PC教室を確保できないクラスについては、紙媒体の図書館資料を使っての情報検索の演習を行ない、講師は担当教員の管理の下、1、2回とも図書館職員が行うこととした。

図書館側の役割分担では、学部との交渉の仲立ちは高田記念図書館が行い、授業内容の詳細の決定、資料準備、マネジメント、講師・ツアー担当は主として利用者支援課で行なった。

導入教育的な授業への図書館の協力という意味では、すでに所沢キャンパスや文学学術院では数年前から図書館・情報リテラシーの授業を行なっているが、早稲田キャンパスにおいては単発の授業支援を除いては、図書館企画のオリエンテーションや情報検索講習会を行なってきたのみであり、それも参加者の減少もあってここ数年はほとんど行なわれていない。その点で今回の学部の授業に協力する形でのリテラシー授業の実施というのは

大変画期的なできごとであった。折りしも、図書館が学習支援連携を前面に打ち出し、アカデミック・リエゾン制度を新設し、学部等からの支援の要請にできる限り協力したいという積極策に転じたこともあり、そのタイミングで申し出を受けたことは双方にとって大変幸運であったといえる。

図書館・情報リテラシーの必要性が高まってきた理由は、何よりもWEB上の玉石混交の膨大な情報と、質の見極めもせずを使用し、あまつさえ剽窃という認識もないままコピー&ペーストで論文を作成してしまうような昨今の風潮に対する危機感であろう。何でもWEBで探すことに慣れ、本で調べるなど面倒とばかり、3、4年生になるまで図書館へは行ったこともない学生もいるという。今回のように1年生のうちから図書館に親しませ、またWEBでの学術情報検索の基本を学ばせる授業は、この点時宜にかなったものといえる。

前期授業実施後のアンケートによれば2回とも概ね好評であった。しかし、いくつか課題が残った。まず図書館ツアーであるが、短期間に多数のツアーが集中し館内に若干の混雑が生じた。ツアー担当者の確保と共に、次回に向けて対策を検討する必要がある。次に情報検索の授業では、学生にもっと身近に感じてもらうために、授業のテーマに即した検索語などについて教員から積極的にアドバイスをもらえるとよい。また、習得させるべき情報検索の内容やスキルは明確なので、クラスによっては担当教員が自ら授業を行なったり、学術院の助手やTAが講師を担うなどの方法があってもよいだろう。

将来的には他の学部とも連携し、さらなる学習支援の拡大を目指すべきである。学部生の多さに比して図書館のマンパワーには限界があるが、効率良くかつ満足度の高い支援の方策について工夫と検討を重ねていきたい。



## 〈事例報告②〉

# 文化構想学部・文学部の基礎演習への授業支援

中村 里弥子（戸山図書館担当課長）

文化構想学部・文学部の必修科目として導入された基礎演習科目は、学部要項に「文章・論文の書き方を中心に、文献の調べ方や論理的な思考方法、プレゼンテーションの方法など、人文科学を学ぶ上で不可欠なスタディスキルを徹底して身につけるための科目です」と記されている。

文献といえば図書館であり、今回の授業支援も図書館を使いこなすことが基礎演習の目的に合致すると考え、戸山図書館でこの部分の協力を申し出たのが始まりである。

この経緯については「ふみくら」No.76（2008年5月）に報告されているので、参照してほしい。

ここでは、一部重複するが、授業支援の内容とその後の結果を報告する。

## 1. 授業支援の内容

基礎演習データベースに掲載した「図書館の利用法」を基にしたCourseN@viフルオンデマンド教材「図書館の利用法」の内容は以下のとおりである。

### 第1部 図書館は知の宝庫

「情報リテラシーとは」～「レファレンス・ブックスの利用」

### 第2部 図書の探し方

### 第3部 論文・雑誌記事・雑誌の探し方

### 第4部 新聞・新聞記事の探し方

### 第5部 学外資料の探し方

### 第6部 インターネットでの情報検索

### 第7部 図書館の便利なサービス

戸山図書館職員が希望する教員の求めに応じてPC端末室や教室で説明した内容も基本的には上記と同じだが、学生の習熟度を尋ねて不要な項目をカットしたり、クラスの課題論文で検索するなどして工夫した。

## 2. クラスへの授業支援

オンデマンド教材とほぼ同じ内容とはいえ、対面ならではの良さもあるようで、授業支援を希望

したクラスは予想外に多かった。

表1 参加数

年度	実施クラス数	参加学生数	割合
2007	38クラス	875名	55%（全69クラス）
2008	35クラス	903名	56.5%（全62クラス）
2009	46クラス※	1,645名	74%（全62クラス）

※延べでは65クラス。詳細は表2参照

2007年度は説明を希望された日時が重なったため、大教室に複数クラスを集めて戸山図書館職員が説明する形をとった。

2008年度は大教室では画面が見にくい等の問題があったのを反省して、クラスごとの実施としたが、こちらの体制が戸山図書館職員4名のみだったため、1日1クラスの先着順受付とした。

2009年度は、まず教員への事前アンケートや、合同クラス編成とPC端末室の確保に、戸山総合事務センターの多大な協力を得た。さらに図書館にアカデミック・リエゾン制度が創設されて、他箇所の図書館職員がツアーの案内やPC端末室・教室でサポートしてくれた。その結果、下記のとおり1日3コース6クラス同時開催が実現できた。

表2 2009年度授業支援概要（2009年11月現在）

コース	A	B	C
形態	3クラスまで合同	2クラスまで合同	1クラス
場所	中央図書館AVホール	PC端末室	各教室かPC端末室
時期	4/20～5/21	5/11～6/4	5/11～7/9
内容	CourseN@vi第1部+中央図書館ツアー	CourseN@vi第2部から第7部	CourseN@vi第2部から第7部（各教員の希望に対応）
実施クラス数	29クラス (11コマ)	21クラス (13コマ)	15クラス (内PC端末室6)

毎年、新入生により効果的な図書館情報リテラシーを身につけてもらおうと試行錯誤を重ねている。膨大な資料や情報からの確かな情報を効率的に探す方法を身につけることは、今後の学業だけでなくその後の生活でもきっと役に立つと信じるからである。

# 「スチューデント・commons」としての学習コーナーの新設

荘司 雅之（図書館事務副部長兼総務課長）

## はじめに

図書館では、中央図書館を改修し「スチューデント・commons」を整備した。これは、今後早稲田大学が取り組むべき方策を明らかにしたWaseda Next 125を基に、図書館が策定した実行計画<sup>1)</sup>に沿った改修であり、図書館が今後の施策の重点とした「自学自習のための学習支援」を実現しようとするものである。

commons<sup>2)</sup>は、昨今の大学図書館界ではインフォメーション、あるいはラーニングといった単語<sup>3)</sup>に続けて使われることが多く「今日、インフォメーション・commonsを抜きに学術図書館を建設、あるいは改修する者がいるだろうか<sup>4)</sup>」と言われるほど、欧米はもとより日本でも盛んに設置されてきた図書館内の新たな区画を言う。

この背景には、1990年代に資料の電子化、インターネットの普及、Webの出現が起きた後、アメリカの大学図書館界で「紙か電子か」という議論とともに、図書館自体が存続できるのかという問題意識が強く持たれたこと、また、学部教育の新たなパラダイムシフト、即ち学習理論が知の伝達から知識の創出・自主的学習に移行してきた<sup>5)</sup>こと（具体的にはグループ学習が増えたこと）などがある。これに対し図書館が「場としての図書館」(library as a place)の視点から応えようとしたものである。

以下に、2009年8月の夏季一斉休業期間中におこなった中央図書館のスチューデント・commonsを中心とした改修を簡単に紹介する。

## 《調査》

既にcommonsを整備している大学の中から、本年1月にアメリカのワシントン大学オデガード学部図書館、また、地理的に近いお茶の水女子大学を訪れ、それぞれ図書館員よりcommonsの良い点、ならびに改善点を直接伺った。

様々なお話を頂いた中で、特に興味深かった点は、ワシントン大学では学生が持ち込むPC用の電源設置の拡充、お茶の水女子大学では明るい色調

のテーブル・椅子を調達したことである。両者とも図書館員側の発想ではなく学生の意見を取り入れたものだという。これに倣って、利用者視点をコンセプトの中心におくことに決め、つい管理的な発想に陥りがちな我々の戒めとした。

## 《場所とゾーニング》

今回の改修は、中央図書館入口（2階）近くの図書カードボックスが設置されていた部分と隣接する情報検索コーナーを合わせた場所、および1階、2階にある休憩室を対象とした。

カードボックスは、オンライン目録（WINEシステム）が整備されたため、ほぼその役割を終えたと考え、利用者のための新たなスペースとすることとした。ここは、仕切り壁の無いオープン・スペースとなっており、人数に応じて効率よくスペースを活用できる利点があるので、このままグループ学習の場とすることにした。グループ学習の場は、例えば戸山図書館には12人座れる個室を二部屋用意し貸出しているが、グループの人数がたとえ2人でも一部屋を占有してしまう。これに対して、今回のオープン・スペースでは移動可能なテーブルを設置したことにより、1人から10名程度までのグループに適宜対応できるものとなった。

しかしながら、オープンスペースでグループ学習、つまり、多少の会話を許す場所とすることは、静かな環境を保つ図書館と整合性がとれなくなるという問題がある。これを解決するため、中央図書館を3つのゾーンに分けることにした。会話が可能なグループ学習のゾーン（オレンジ・ゾーン）、会話は不可だがPCなどの機器の使用が可能なゾーン（グリーン・ゾーン）、会話も機器の使用も不可の静かなゾーン（ブルー・ゾーン）である。

キャンパス内で静かな場所は図書館だけだという意見や、同じ学生でもグループで学習する場合も一人静かに読書する場合も多いとの見解もあり、オレンジ・ゾーンは面積的に小さなものからスタートすることとした。



改修前の様子



改修後の様子

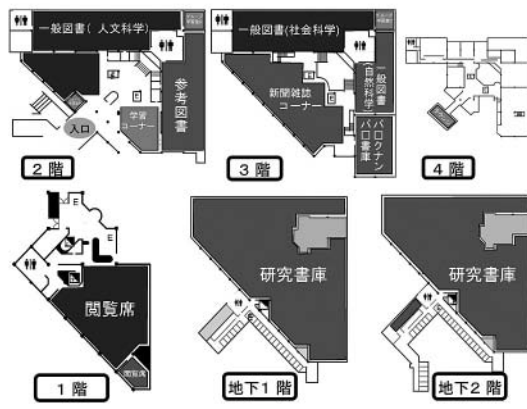


## 中央図書館の利用ゾーンの設定について

中央図書館では、皆さんに快適な学習空間を提供するため利用ゾーンを設定しています。

PC等の機器類の使用、またグループ学習の必要性により、オレンジ・グリーン・ブルーの三つのゾーンから、それぞれの目的に最適な場所をご利用ください。

早稲田大学図書館



ゾーニングのポスター

このゾーニング計画は、改修の一月前に館内で決定し、掲示して利用者へ周知を図った。図書館内での音に関するゾーンを明確に規定したことにより、騒音トラブルを未然に防ぐ効果があったようで、利用者からも好評である。

### 《テーブル、椅子》

中央図書館には、伝統的な静かな環境の読書にふさわしい、木製の重厚感がある落ち着いた色調の什器を揃えている。今回、新たに設置する学習コーナーでは、今まで図書館では許されなかった

会話が可能な場所であるという差別化や、お茶の水女子大学の事例を参考に明るい色の什器を選んだ。お茶の水女子大学を見学した際に、円形のテーブルは正対して座ることになるためか複数人での利用率が低い（一人で座っている）ことから、座った時に視線が直接交わらない「豆型」のテーブルを選択した。

PC用の電源は、ワシントン大学のように、当初は床から筒状の電源タワーを設置し、テーブルを動かして様々に組み合わせてもPC用の電源が利用できる仕様を計画したが、諸般の事情によりフリーアクセスの床から各テーブルに電源を立ち上げテーブルタップをテーブル下に設置する形態となった。

### 《今後の課題》

自学自習の場は、端末室のようにPCを並べる配置ではなく、ノート類や紙の資料も広げて自前のノートPCを使える環境が必要<sup>6)</sup>であると考えスペース整備を始めたが、予想外に中央図書館へ来館する学生はPCを持参しない。ある大学院生に尋ねたところ、ノートPCは所有しているが重いため切羽詰らないと持参しないとのことである。今後は、明治大学や立教大学の図書館で好評なノートPCの貸し出しサービスを提供したいと計画している。

また、国内外の図書館におけるラーニング・コモンズでは、ITに関するヘルプデスクやレポート/論文作成支援デスクが設置されている。このような図書館以外の学内組織により提供されるサービスと図書館のサービスが協同して、学習のためのワンストップサービスの場を備えることは、学生の視点からすれば当たり前期待されるサービスである。ITセンターのヘルプデスクやライティングセンターの出張所を図書館内のチューデント・コモンズにも設置するなど、今後も学生・利用者の視点からの改善を続けていきたい。

1) 「Waseda Next 125」と図書館運営にかかる諸施策（実行計画）について、

「2008年度 早稲田大学図書館年報」. p.2-3

2) 「共有」あるいは「公共の場」という意味。アメリカの植民地時代に街の広場（タウン・コモンズ）が人々の社交の場であったように、図書館内のコモンズは学生同士あるいは学生と教職員との知的な出会いを実現する広場、場所だという意味でコモンズという単語が使われているのであろう。

3) アカデミック、コラボレーション、ティーチング、テクノロジー、メディアという単語がインフォメーション、アカデミックの代わりに、若しくは一緒に使われている。

Scott Bennett. The Information or the Learning Commons: Which Will we have? The Journal of Academic Librarianship, Vol.34, issue 3, p.183(2008)

4) Ditto.

5) J. Murrey Atkins Library. "From information commons to learning commons". (オンライン), 入手先 <http://library.unc.edu/infocommons/conference/minneapolis2005> (参照2009-11-16)

アメリカでは、インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズの違いは、呼称の違いではなく本質的に別のものだとする議論もあるが、ここでは立ち入らない。

6) 上岡真紀子. 「関係性マネジメントのための利用者調査を目指して」.(オンライン), 入手先 [http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kenshukai/2009\\_20.pdf](http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kenshukai/2009_20.pdf) (参照2009-11-16)

## 新収の自筆本『明月記』断簡

兼 築 信 行 (文学学術院教授)

著名な歌人であり、古典学者であった藤原定家(1162—1241)の日記『明月記』は、平安時代末から鎌倉時代前期の歴史・社会・文学等々を研究するうえでの基本史料として、極めて重要な価値を有している。その自筆本は、冷泉家時雨亭文庫に58巻ほかがまとまって所蔵されており、国宝に指定されているが、巷間に流出した巻や断簡も多い。それらの情報については、『明月記研究提要』(2006年、八木書店)所収「『明月記』原本及び原本断簡一覧」を見るのがよいが、新たな断簡も時おり出現するというのが現下の状況である。

本学図書館では、この『明月記』関連の資料を精力的に収集してきたが、このほど、その決定版ともいべき断簡を収蔵することができたので、以下に簡略な報告と紹介とを行っておきたい。

自筆本『明月記』の断簡として、本学図書館が所蔵するものには、以下の3点があった(請求番号順)。

建暦3年11月11日～12日(後欠) リ05 15647

嘉禄元年7月5日(前後欠) リ05 15648

建暦元年10月22日(前後欠) リ05 15660

このほか、模写本として2巻(リ05 02024)、10巻(リ05 15584)があり、他にも、検討を要する伝自筆断簡や、『明月記』から剥がされた紙背文書の掛幅が所蔵されている。

しかしながら、自筆本断簡については、いずれも零細なものであり、もう少しボリュームのある資料、紙背を付すものを収蔵することができないだろうかと切望していたところ、幸い建暦元年の10月23日条をまるごと切断して卷子に仕立てたものが古書肆の取り扱うところとなっているとの情報を得て、調査したところ、紙背に2通の書状を存する極めて状態のよい原本であることが確認できた。そこで申請を経て購入が決定され、収蔵されたという経緯である。いまだ整理中のため、請求番号は付されていない。

本断簡巻は、先に述べたように建暦元年10月23日条の全文にあたり、これに先立って収蔵した10月22日断簡(リ05 15660)の翌日部分となる。このあたりの記事自体は、国書刊行会版活字本にも収録され、従来から知られていたものであるが、訂正などの跡が著しく、活字本の字句を修正することもできる。自筆原本ならではの資料価値を、高く評価することができよう。

22日及び23日条のこれら断簡は、実は、円満院旧蔵「建暦元年冬上」の原巻から分断されたものであった。元来は冷泉家に所蔵され、国宝指定の原本と同一の表紙が付されていたこと、円満院が作製した複製により、その原態を確認することができる。なお22日条の断簡は紙背が剥がされたものであるのに対し(痕跡は確認できる)、23日断簡には仮名書状と、かなり長文の書状の一部が紙背として存している。その詳細は今後の調査を俟ちたいが、紙背文書をも披見できるように表装がなされている。

建暦元年(1211)10月22日には、順徳天皇の御禊行幸が行なわれている。22日条断簡は、その記事の一部となるが、活字本を訂正できる箇所がある。なお、本断簡については『明月記研究』12(2010年1月)に資料紹介を行ったので、参照されたい。23日は朱雀門(大内裏南面中央の正門)が顛倒したという記事からはじまる。同日条にはこの事件の関連記事が多く、まことに興味深い。

この新断簡の収蔵によって、本学の『明月記』関係資料は一応のまとまりを達成したといえるのではないだろうか。もちろん日本大学総合図書館のように、原本巻を収蔵できればそれに越したことはないが、そのような僥倖は俄かに望み得べくもない。紙背を有する断簡は、定家筆『長秋記』や、和歌・歌学関係の写本類と相俟って、本学の定家関係コレクションに核を与えるものとなることであらう。



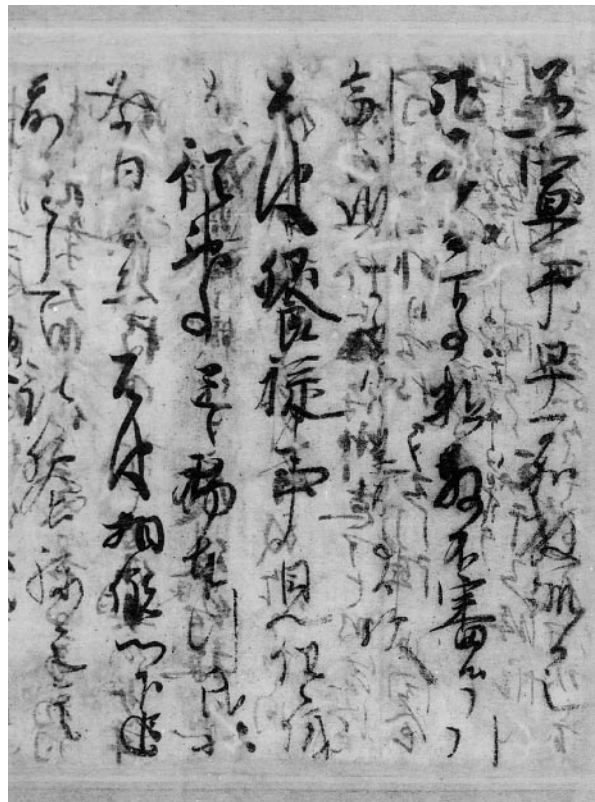




紙背仮名書状

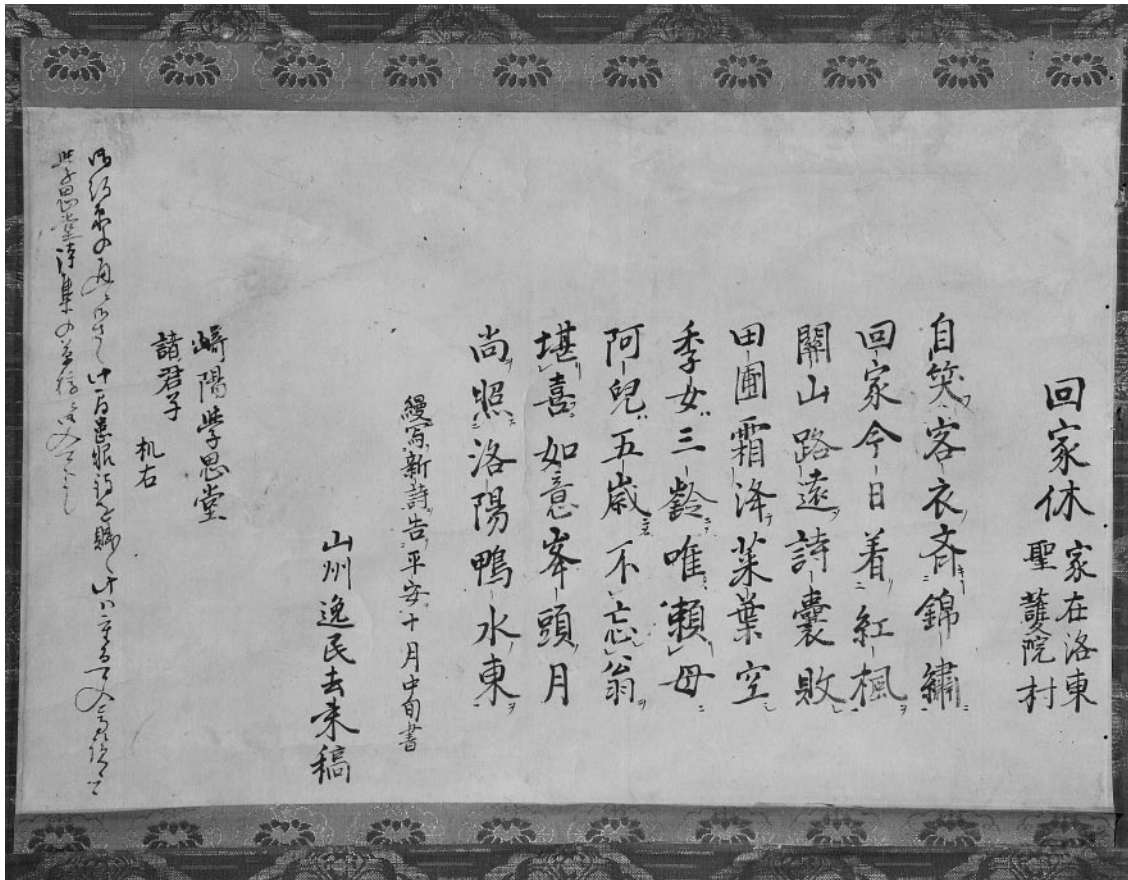


紙背書状



元禄十二年十月中旬 学思堂宛去来書簡

宮脇 真彦 (教育・総合科学学術院教授)



〔翻刻〕

回家休

家在洛東  
聖護院村

自笑客衣齊錦繡

回家今日着紅楓

關山路遠詩囊敗

田圃霜降菜葉空

季女三齡唯頼母

阿兒五歲不忘翁

堪喜如意峯頭月

尚照洛陽鴨水東

縵写新詩告平安 十月中旬書

山州逸民去来稿

崎陽學思堂

諸君子

机右

御約束の通二御さ候。此間患眼詩を賦候。此ハ重而可入高覽候間、學思堂詩集の草稿二御入可被下候。



向井去来は、元禄時代の俳人。宝永元年（1704）9月10日没。54歳。貞享初年頃（1684）から松尾芭蕉に師事して、同じく蕉門の野沢凡兆とともに『猿蓑』（元禄4年刊）の編者となり、蕉門の高弟として芭蕉の信頼が篤かった。元禄七年（1694）に芭蕉が没して後は、『有磯海』『となみ山』の編集を助け、また卯七（義理の従兄弟）と『渡鳥集』を共編するのみならず、芭蕉の俳諧の真髓を後世に伝えるべく、いくつかの俳論書を表した。芭蕉の言説を伝えるものとして著名な『去来抄』（稿本）は、その集大成である。

去来は、肥前長崎の儒医向井元升の次男として、長崎に生まれた。なお、三男、向井元成（俳号、魯町）は延宝8年（1680）、父元升の創建した長崎聖堂の祭主となり、貞享二年、舶載の書中に禁書を発見、その功をもって代々輸入書籍の書物改めの職を世襲したという。

本書簡が元禄十二年と推定されるのは、去来が長崎への旅から帰京しての所懐を述べているところからである。すなわち、去来は前年の6月下旬、郷里長崎への旅に出立する。これは、4ヶ月ほど前に16歳で亡くなった甥守寿（英俊）の新盆を長崎で行うためだったろうと推測されている。英俊は、去来の猶子であった。この故郷への旅で、去来は長崎に1年3ヶ月ほど滞在、元禄十二年十月に京都の自宅に帰っている。「十月下旬」の日付をもつ本書簡は、帰宅後まもなく、郷里の長崎に宛てて出されたものである。

本書簡は、「回家休」と題された七言律詩を、長崎「学思堂」の人々に寄稿したものである。宛先の学思堂は、おそらく去来の弟元成の学塾であろう。尚々書きに「御約束の通ニ御ざ候」とあり、また、「此間、患眼詩を賦候、此ハ重而可入高覧候」とあることから、長崎滞在中に約束しての作であったことがわかる。また、別に「患眼詩」なる詩を送る旨書かれているが、こちらはその書簡が伝存していない。「学思堂詩集の草稿ニ御入可被下候」と結んでいるので、学思堂では『学思堂詩集』なる漢詩集編纂の予定があり、それに入集せしめんと約束であったにちがいない。残念ながら、その詩集は確認することが出来ない。

試みに詩を書き下しにして、おおよその意味を解しておこう。

自ら笑ふ 客衣 錦繡に斉しきことを  
回家 今日 紅楓に着く  
関山 路遠くして詩囊敗れ  
田圃 霜降りて菜葉空し  
季女は三齡にして唯母に頼り  
阿兒は五歳にして翁を忘れず  
喜ぶに堪へず如意 峯頭の月  
尚 洛陽 鴨水の東を照らす

旅衣はあちこち破れてまるで錦の綴れのように（錦を飾るなどと洒落てみてもしようがない）。帰ってきた我が家は、今、真っ赤に紅葉した楓が覆って美しい（まさに錦秋）。故郷への遠い旅路で我が詩心は尽きてしまい、田畑には霜が降りて菜の葉もみな枯れている。末の娘は三歳でただただ母に頼り切っているだけだが、上の娘は五歳で、この翁の私を忘れずにいてくれた。喜びに堪えないことだ、この如意が岳の上にかかる月をみれば。今なお、京の鴨川の東の我が家のある辺りを明るく照らしていることだ一、という意味になろうか。長旅から帰っての、家族に接した喜びに溢れている詩である。当時去来は49歳。家族は、5歳の長女登美、3歳の次女多美、妻可南女がいた。

去来の業績を集めた『去来先生全集』（落柿舎保存会刊、昭和57）に、本書簡は考証を付して掲載されている。ただし、編纂時には原物がなく、旧蔵者初山梓月編『俳諧古典集』所載の写真によって収められた。その原物が出現したことを喜びたい。なお、上記の解説は、すべてこれらによって記したものであることを断っておく。

\*

昨年五月、故雲英末雄先生ゆかりの鎌倉の古美術商に、去来の漢詩が出ていると教えてくださり、わざわざそこに案内して下さったのは、雲英先生の教え子である伊藤善隆氏であった。その古美術商から、雲英先生が毎月2度は鎌倉を散策された序でに寄られていたことや、年末には毎年、伊藤氏など教え子の数人と一緒に見えられたことなど、いろんな話をうかがった。

本書簡は、その古美術商に初山梓月旧蔵のものがまとまって入ったなかの残りの一つだった。

鎌倉からの帰り、今度は伊藤氏が、雲英先生との思い出をずっと話されていたのが、とても印象的だった。



# 中央図書館ハンゲル図書「族譜コレクション」について

高木 理久夫 (資料管理課)・工藤 美和子 (株キャンパス)

当館は、ハンゲルの図書資料として、朝鮮半島の地方誌と族譜をコレクションの中核として収集している。2009年8月現在、所蔵されている族譜及び関連書籍のタイトル数は201点、冊数は745冊にのぼる(表2参照)。韓国における姓氏の数は、日本に比べてはるかに少なく、約280ほどで、当館には64の姓氏の族譜が所蔵されている(表2参照)。韓国での姓氏別人口は、多い順に金、李、朴、崔、鄭氏と続き、この5氏だけで人口の約半分を占め、当館所蔵の族譜もタイトル数順で並べると、5番目まではほぼ同じ順になっている。

朝鮮半島では、その家系の始祖の出身地、またはその子孫が住みついた土地を本貫という。姓が少ないため同族を区分することが難しくなり、本貫が必要になったとも言われている。韓国の人口の約5分の1を占める金氏には、本貫が約350もあり、そのうち本貫が金海の「金海金氏」は韓国最大の氏族集団で、その人口は約410万人(総人口の約9%)にのぼる。「金海金氏」といったような姓と本貫を同じくする同姓同本の氏族集団が現在でも組織をつくっており、族譜の編纂や保存にあたっている。

族譜には始祖を同じくする同系の氏族をすべて収録した「大同譜」のほかに、始祖以降、いくつかに分派し、その派の氏族についてまとめられた「派譜」や「世譜」と呼ばれるものがある。表1により、当館の族譜をタイトル別に見ると、大同譜50、世譜48、派譜31、族譜11、系譜2、家乗譜1、その他58点となっている。刊行年代別では、20世紀後半に刊行されたものがほとんどだが、最も古いものでは1937年刊行の『慶州崔氏上系世譜』があり、刊行年が解放後から2000年のものが146、2001年以降が42、刊行年代未詳のものが12点ある。以上の族譜について、姓氏別にリストにまとめたものが表3である。今後より一層、このコレクションが韓国の歴史、民族、社会文化研究の基礎資料として、大いに活用されることを願いたい。

最後に、族譜に関するハンゲルおよび日本語の

参考ツールについてふれておきたい。

①崔鍾仁編著『族譜事典』(ソウル譜廳 2006)

族譜に関する説明や専門用語解説のほか、「人口住宅総調査」(統計庁 2000年)に基づく姓氏別人口や本貫別人口が収録されている。当館所蔵(請求記号F288-521)。

②富川族譜専門図書館 \* <http://www.jokbo.re.kr/>

この図書館の族譜所蔵数は、韓国国立中央図書館に次ぐといい、約250の姓氏の族譜約3万冊、関連書籍5000冊ほどが所蔵されている。同館のHPでは姓氏別、本貫別により所蔵族譜の検索が可能で、各氏族の概要もまとめられている。

③嶋 陸奥彦「韓国の族譜—刊行する行為という視点から—」『東アジア家系記録(宗譜・族譜・家譜)の総合的比較研究』(2004)収録。当館所蔵(請求記号288-264)。

④同「親族制度からみた朝鮮社会の変動—族譜の検討を中心に」 溝口雄三ほか編『長期社会変動』(東京大学出版会 1994)収録。当館所蔵(請求記号220-23-6他)。嶋氏は、東北大学大学院文学研究科教授である。

⑤東京大学東洋文化研究所朝鮮族譜データベース

日本で最も多くの族譜を所蔵している東京大学東洋文化研究所では、所蔵する族譜が「朝鮮族譜データベース」としてまとめられており、HPでの閲覧が可能である。蔵書検索のほか、族譜の冒頭に記されている序文を、画像ファイルで見ることができる。また、宮寫博史氏による「東洋文化研究所所蔵の朝鮮半島族譜資料について」という論文も掲載されており、大いに参考になる。

\* <http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~koreandb/zokufuindex.htm>

表1

族譜種類	大同譜	世譜	派譜	族譜	系譜	家乗譜	その他	計
タイトル数	50	48	31	11	2	1	58	201

表2 姓氏別所蔵数

성	姓	タイトル数	冊数
김	金	31	102
이	李	24	64
박	朴	16	73
정	鄭	12	39
최	崔	10	42
송	宋	5	8
임	林	5	12
곽	郭	4	7
신	申	4	21
정	丁	4	44
황	黃	4	18
고	高	3	13
권	權	3	11
유	柳	3	10
유	劉	3	17
윤	尹	3	5
임	任	3	11
장	張	3	15
전	田	3	17
강	姜	2	7
구	具	2	3
기	奇	2	6
남	南	2	8
배	裴	2	6
변	邊	2	13
안	安	2	10
오	吳	2	7
여	呂	2	16
우	禹	2	5
조	趙	2	8
주	朱	2	4
한	韓	2	12

성	姓	タイトル数	冊数
가	賈	1	1
국	鞠	1	1
금	琴	1	4
남궁	南宮	1	1
노	盧	1	5
동	董	1	3
맹	孟	1	1
명	明	1	4
문	文	1	8
민	閔	1	2
반	潘	1	1
방	房	1	4
백	白	1	11
변	卞	1	7
서	徐	1	3
선우	鮮于	1	1
성	成	1	1
소	蘇	1	4
손	孫	1	1
신	慎	1	1
신	辛	1	2
양	楊	1	5
어	魚	1	1
엄	巖	1	7
연	延	1	4
위	魏	1	8
지	池	1	10
차	車	1	1
채	蔡	1	4
하	夏	1	3
허	許	1	1
홍	洪	1	1
<b>計</b>		<b>201</b>	<b>745</b>

表3 所蔵族譜リスト

姓	本貫	現行政区	書名	発行年	請求番号
コ					
賈	蘇州	中国	蘇州賈氏大同譜	1983	F288-298
姜	晉州	慶南 晉州市	晉州姜氏世譜	1984	F288-270-1~5
姜			姜氏事跡寶鑑	1996	F288-441-1~2
高	濟州	濟州 道濟州市	濟州高氏大同譜上世篇	1983	F288-268
高	濟州	濟州 道濟州市	濟州高氏世德録	2001	F288-347~1-2
高	濟州	濟州 道濟州市	濟州高氏大同譜靈谷公派篇	1975	F288-514-1~10
郭	善山	慶北 龜尾市善山面	善山郭氏大同譜	1996	F288-072
郭	清州	忠北 清州市	高麗清州郭門名賢録	1979	F288-010
郭	清州	忠北 清州市	清州郭門門族史	2005	F288-472
郭	苞山	大邱 達城郡玄風面	苞山郭氏海美君派世譜	[1947]	F288-205-1~4
具	綾城	全南 和順郡	綾城具氏文獻録	1989	F288-556-1~2
具	綾城	全南 和順郡	綾城具氏都元帥公派世譜	1989	F288-557
鞠	潭陽	全南 潭陽郡	潭陽鞠氏大同譜	1974	F288-493-1~2
權	安東	慶北 安東市	安東權氏忠康公派譜	1995	F288-396-1~5
權	安東	慶北 安東市	安東權氏副正公派世譜	1998	F288-471-1~5
權	安東	慶北 安東市	安東權門實録	2004	F288-506-1~2
琴	奉化	慶北 奉化郡	奉化琴氏世譜	2005	F288-414-1~4
奇	幸州	京畿道高陽市	幸州奇氏大同譜 壬戌譜再簡本	1987	F288-269
奇	幸州	京畿道高陽市	幸州奇氏大同譜	2004	F288-403-1~6
金	江陵	江原道江陵市	江陵金氏翰林公派文獻録	1996	F288-541
金	慶州	慶北 慶州市	慶州金氏世蹟系譜	[1980]	F288-212-1~2
金	慶州	慶北 慶州市	慶州金氏雞林君後僖後敬公派譜	2004	F288-412
金	慶州	慶北 慶州市	慶州金氏大安君後秀山君派譜	2005	F288-424
金	慶州	慶北 慶州市	慶州金氏鶴洲公派世譜	2000	F288-502
金	慶州	慶北 慶州市	系譜研究 十週年紀年號	2002	F288-561
金	固城	慶南 固城郡	固城金氏大同譜	1980	F288-574-1~2
金	固城	慶南 固城郡	固城金氏文獻録	1980	F288-574-3
金	光山	光州 光山區	光山金氏判軍器監事公派譜	2003	F288-401-1~4
金	光山	光州 光山區	光山金氏典理判書公派史要	1987	F288-491
金	光山	光州 光山區	光山金氏三悔公派譜	1990	F288-543
金	金海	慶南 金海市	金海金氏京派統合譜	1999	F288-214-1~3
金	金海	慶南 金海市	金海金氏判書公派譜	1997	F288-432-1~5
金	金海	慶南 金海市	金海金氏三賢派家乘譜	[197-]	F288-465
金	金海	慶南 金海市	金海金氏安敬公派譜	1989	F288-575
金	道康	全南 康津郡	道康金氏大同譜	1993	F288-350-1~5
金	扶寧(扶安)	全北 扶安郡	扶寧(扶安)金氏少尹公派合譜	1999	F288-405-1~3
金	順天	全南 順天市	順天金氏鐵原公派世譜	1980	F288-365
金	順天	全南 順天市	順天金氏大同譜	2004	F288-408-1~10
金	彦陽	蔚山 蔚州郡彦陽邑	彦陽金氏族譜	2001	F288-519-1~7
金	延安	黃南 延安郡	延安金氏丁卯大同譜	1987	F288-567-1~3
金	靈光	全南 靈光郡	靈光金氏判書公派世譜	1990	F288-216-1~2
金	永山	忠北 永同郡	永山金氏世譜	1962	F288-570-1~10
金	義城	慶北 義城郡	義城金氏五土山誌	1989	F288-258
金	義城	慶北 義城郡	義城金氏大同譜	1992	F288-367-1~13
金	義城	慶北 義城郡	義城金氏參議公派文獻録	1994	F288-534
金	全州	全北 全州市	全州金氏稷山派譜	2005	F288-464
金	清道	慶北 清道郡	清道金氏世譜	1982	F288-419-1~3
金	清風	忠北 堤川市清風面	清風金氏世譜	[1958]	F288-309-1~12
金	豐山	慶北 安東市豐山面	豐山金氏世譜	1990	F288-486-1~3
金	海豊	黃北 開豊郡	海豊金氏世德録	1999	F288-344
ナ					
南	宜寧	慶南 宜寧郡	宜寧南氏族譜	2006	F288-517-1~7



姓	本貫	現行政区	書名	発行年	請求番号
南	宜寧	(京畿道廣州市直洞)	공은골 南氏의 歷史記錄	2004	F288-467
南宮	咸悅	全北 益山市咸悅邑	咸悅南宮氏文獻世考	1981	F288-475
盧	豐川	黃南 松禾郡	豐川盧氏世譜	2004	F288-551-1~5
董	廣川	中国	廣川董氏世譜	1968	F288-469-1~3
孟	新昌	忠南 牙山市新昌面	新昌孟氏大同譜 新昌君派編	1989	F288-547
文	南平	全南 羅州市南平邑	南平文氏大同譜	1982	F288-304-1~8
明	西蜀	中国	西蜀(延安)明氏大同譜	1986	F288-511-1~4
閔	驪興	京畿道驪州郡	驪興閔氏文仁公派知先錄	1999	F288-568-1~2
朴	高靈	慶北 高靈郡	高靈朴氏武肅公派世譜	2004	F288-461-1~4
朴	務安	全南 務安郡	務安朴氏大同譜	1984	F288-210-1~4
朴	密城	慶南 密陽市	密城朴氏嘯皋公派世譜	1978	F288-447-1~2
朴	密城	慶南 密陽市	密城朴氏都評議公派大同譜	[19--]	F288-573-1~12
朴	密陽	慶南 密陽市	密陽朴氏糾正公后節度使公派世譜	1997	F288-407-1~3
朴	密陽	慶南 密陽市	密陽朴氏貞齋公派譜	2002	F288-470-1~5
朴	密陽	慶南 密陽市	密陽朴氏清齋公派世譜	1985	F288-553-1~10
朴	密陽	慶南 密陽市	密陽朴氏先賢史料集成	1997	F288-563-1~3
朴	密陽	慶南 密陽市	密陽朴氏主簿公派譜	1998	F288-564-1~2
朴	順天	全南 順天市	順天朴氏實錄	1994	F288-485-1~3
朴	順天	全南 順天市	順天朴氏世系圖	1994	F288-485-4
朴	寧海	慶北 盈德郡寧海面	寧海朴氏世鑑	1980	ㄹ04-4808-1~2
朴	寧海	慶北 盈德郡寧海面	寧海朴氏大同譜	1977	F288-529-1~10
朴	月城	慶北 慶州市	月城朴氏大同世譜	2000	F288-542-1~6
朴	咸陽	慶南 咸陽郡	咸陽朴氏文獻錄	1989	F288-490
朴			朴氏總譜	2001	F288-395-1~4
潘	巨濟	慶南 巨濟郡	巨濟潘氏大同譜	1976	F288-300
房	南陽	京畿道華城市南陽洞	南陽房氏大同譜	1984	F288-238-1~4
裴	慶州	慶北 慶州市	慶州裴氏大同譜	1986	F288-454-1~4
裴			裴氏의 뿌리·武烈公本傳	1997	F288-346-1~2
白			白氏大同譜	1982	F288-306-1~11
卞	草溪(密陽)	慶南 陝川郡草溪面	草溪密陽卞氏大同譜	1987	F288-014-1~7
邊	黃州·原州	黃北 黃州郡·	黃原州邊氏大同譜	1986	F288-022-1~2
邊	黃州·原州	江原道原州市	黃原州邊氏文獻錄	1988	F288-023-1~11
徐	利川	京畿道利川市	利川徐氏良景公派世譜	2004	F288-404-1~3
鮮于	太原	中国	太原鮮于氏世譜	2006	F288-507
成	昌寧	慶南 昌寧郡	昌寧成氏文獻誌	1985	F288-489
蘇	晉州	慶南 晉州市	晉州蘇氏大同譜	1981	F288-206-1~4
孫	密陽	慶南 密陽市	密陽孫氏通政公派譜	1997	F288-513
宋	恩津	忠南 論山市恩津面	恩津宋氏舊蹟攷	1989	F288-015
宋	恩津	忠南 論山市恩津面	恩津宋氏潛夫公派譜	1998	F288-402-1~2
宋	恩津	忠南 論山市恩津面	恩津宋氏吏曹佐郎公派譜	1994	F288-422
宋	清州	忠北 清州市	清州宋氏世譜	2005	F288-413-1~3
宋			宋氏大同寶鑑	1982	F288-266
申	平山	黃北 平山郡	平山申氏大同譜	1989	F288-302-1~6
申	平山	黃北 平山郡	平山申氏文獻錄	1978	F288-303
申	平山	黃北 平山郡	平山申氏系譜	1962	F288-426-1~12
申	平山	黃北 平山郡	平山申氏世鑑	2004	F288-509-1~2
辛	靈山·寧越	慶南 靈山面·江原道寧越郡	靈山·寧越辛氏世德錄	2002	F288-539-1~2
慎	居昌	慶南 居昌郡	居昌慎氏史	1981	F288-495

姓	本貫	現行政区	書名	発行年	請求番号
○					
安	順興	慶北 榮州市順興面	順興安氏參判公派世譜	1981	F288-263-1~2
安	順興	慶北 榮州市順興面	順興安氏第三派大同譜	1996	F288-537-1~8
楊	清州	忠北 清州市	清州楊氏大同譜	1987	F288-434-1~5
魚	咸從	平南 江西郡	咸從魚氏文貞公派譜	1991	F288-428
巖	寧越	江原道寧越郡	寧越巖氏大同譜	1996	F288-310-1~7
呂	星山	慶北 星州郡	星山呂氏大同譜	2006	F288-516-1~4
呂	咸陽	慶南 咸陽郡	咸陽呂氏世譜	1986	F288-566-1~12
延	谷山	黃北 谷山郡	谷山延氏大同譜	1994	F288-477-1~4
吳	海州	黃南 海州市	海州吳氏世譜	1977	F288-262-1~2
吳	海州	黃南 海州市	海州吳氏陽亭公派譜	1979	F288-435-1~5
禹	丹陽	忠北 丹陽郡	丹陽禹氏安靖公派譜	1982	F288-299-1~3
禹	丹陽	忠北 丹陽郡	丹陽禹氏世譜	1981	F288-448-1~2
魏	長興	全南 長興郡	長興魏氏大同譜	1999	F288-565-1~8
柳	高興	全南 高興郡	高興柳氏文獻	[1965]	F288-364-1~4
柳	文化	黃南 信川郡	文化柳氏左相公派譜	1990	F288-476-1~5
柳	全州	全北 全州市	全州柳氏壺隱公派世譜	1993	F288-264
劉	江陵	江原道江陵市	江陵劉氏大同譜	1994	F288-348-1~13
劉	江陵	江原道江陵市	江陵劉氏淡虛堂世譜	1989	F288-571
劉			劉氏世德錄	2001	F288-480-1~3
尹	南原	全北 南原市	南原尹氏文孝公派世譜	1991	F288-308-1~2
尹	南原	全北 南原市	南原尹氏世稿	2004	F288-410-1~2
尹	坡平	京畿道坡州市坡平面	坡平尹氏大觀	1989	F288-421
李	光山	光州 光山區	光山李氏世譜	1988	F288-278
李	光山	光州 光山區	光山李氏世譜文獻錄	1988	F288-279
李	廣州	京畿道廣州市	門中150年史	2004	F288-400
李	慶州	慶北 慶州市	慶州李氏菊堂公派譜	[2002]	F288-431
李	舒川(西林)	忠南 舒川郡	西林舒川李氏大同世譜	2006	F288-518-1~2
李	永川	慶北 永川市	永川李氏南谷公派譜	[198-]	F288-450-1~5
李	禮安	慶北 安東市禮安面	禮安李氏司直公派族譜	1989	F288-265
李	禮安	慶北 安東市禮安面	禮安李氏族譜	2007	F288-558-1~3
李	牛峰	黃北 金川郡	牛峰李氏世譜	1975	F288-528-1~2
李	全州	全北 全州市	全州李氏德泉君派譜	1983	F288-215-1~4
李	全州	全北 全州市	全州李氏任城君派世譜	2004	F288-409
李	全州	全北 全州市	完豐寶鑑 全州李氏完豐大君派의일	2003	F288-345-1~2
李	全州	全北 全州市	全州李氏完豐大君北靑梨花洞派譜	1990	F288-468
李	全州	全北 全州市	全州李氏厚寧君派世譜	1987	F288-433-1~2
李	全州	全北 全州市	全州李氏密城君派世譜	2002	F288-462-1~5
李	全州	全北 全州市	全州李氏益安大君派大同譜	1984	F288-478-1~7
李	全州	全北 全州市	全州李氏成宗王子安陽君派世譜	1998	F288-512-1~3
李	全州	全北 全州市	全州李氏襄度公派譜	1985	F288-527-1~5
李	全州	全北 全州市	全州李氏襄度公派世德誌	1985	F288-530
李	全州	全北 全州市	全州李氏科擧及第者總覽	2005	F288-446
李	平昌	江原道平昌郡	平昌李氏世譜	1984	F288-415-1~6
李	咸安	慶南 咸安郡	咸安李氏略史	2003	F288-329
李	咸平	全南 咸平郡	咸平李氏咸城君派譜	1979	F288-232-1~7
李	咸平	全南 咸平郡	咸平李氏大宗中要覽	1991	F288-510
林	羅州	全南 羅州市	羅州林氏大同譜	1996	F288-217-1~6
林	扶安	全北 扶安郡	扶安林氏密直公派譜	2003	F288-474
林	全州	全北 全州市	全州林氏兆陽君派世譜	1997	F288-452
林	平澤	京畿道平澤市	平澤林氏忠貞公系觀海公派譜	1988	F288-423
林			林氏先祖寶鑑	1999	F288-483-1~3
任	長興	全南 長興郡	長興任氏大同譜	[198-]	F288-363-1~4

姓	本貫	現行政区	書名	発行年	請求番号
任	豊川	黄南 松禾郡	豊川任氏世譜 上編	1988	F288-351-1:1~1:6
任	豊川	黄南 松禾郡	豊川任氏文獻録 人物考篇	2004	F288-417
六					
張	結城	忠南 洪城郡結城面	結城張氏大同譜	1976	F288-397-1~6
張	沃溝	全北 郡山市沃溝邑	沃溝張氏大同譜	2004	F288-406-1~2
張	仁同	慶北 漆谷郡若木面	仁同張氏太常卿公派世譜	1996	F288-182-1~7
田	南陽	京畿道華城市南陽洞	南陽田氏龍宮縣監公派譜	1999	F288-153
田	潭陽	全南 潭陽郡	潭陽田氏世德史	1998	F288-562-1~3
田	潭陽	全南 潭陽郡	潭陽田氏大同譜	1987	F288-576-1~13
鄭	東萊	釜山 東萊區	東萊鄭氏校書郎公派世譜	1994	F288-352-1~7
鄭	西原	忠北 清州市	西原鄭氏文獻録	1988	F288-554-1~2
鄭	迎日	慶北 浦項市	迎日鄭氏世譜	1981	F288-362-1~3
鄭	迎日	慶北 浦項市	迎日鄭氏判決事公派文獻録	1997	F288-411
鄭	晉州	慶南 晉州市	晉州鄭氏族譜	1984	F288-349-1~5
鄭	晉州	慶南 晉州市	晉州鄭氏乾山六松二派文獻録	1999	F288-538
鄭	晉州	慶南 晉州市	全國晉州鄭氏世蹟誌	1998	F288-560
鄭	青山	忠北 沃川郡青山面	青山鄭氏大同譜	1982	F288-451
鄭	清州	忠北 清州市	清州鄭氏大同譜	1983	F288-569-1~6
鄭	草溪	慶南 陝川郡草溪面	草溪鄭氏宗史	1975	F288-449
鄭	河東	慶南 河東郡	河東鄭氏大同合譜	1960	F288-234-1~9
鄭	海州	黄南 海州市	海州鄭氏寧陽尉派譜	1981	F288-211-1~2
丁	羅州	全南 羅州市	羅州丁氏族譜	1999	F288-425-1~10
丁	押海	全南 新安郡押海面	押海丁氏大同譜 壬午譜	2000	F288-285-1~17
丁	靈光・昌原	全南 靈光郡・慶南 昌原市	靈光(靈城)昌原(後昌原)丁氏族譜	1995	F288-546-1~10
丁	靈城	全南 靈光郡	靈城丁氏府使公派譜	1977	F288-307-1~7
趙	玉川	全北 淳昌郡	玉川趙氏大同譜	[1968]	F288-535-1~6
趙	玉川	全北 淳昌郡	玉川趙氏文獻考	[1968]	F288-536-1~2
朱	新安	中国	新安朱氏先賢録	2000	F288-492-1~2
朱	新安	中国	新安朱氏大同譜	1981	F288-533-1~2
池	忠州	忠北 忠州市	忠州池氏大同譜	1993	F288-301-1~10
六					
車	延安	黄南 延安郡	延安車氏大同譜 系圖録	2004	F288-416
蔡	平康	江原道平康郡	平康蔡氏族譜	1981	F288-508-1~4
崔	江陵	江原道江陵市	江陵崔氏大同譜	1984	F288-466-1~8
崔	慶州	慶北 慶州市	慶州崔氏族譜	[1952]	F288-233-1~9
崔	慶州	慶北 慶州市	慶州崔氏上系世譜 卷一	1937	F288-463
崔	全州	全北 全州市	全州崔氏九修世譜敬節公派重刊譜	1996	F288-440-1~4
崔	全州	全北 全州市	全州崔氏文忠公后判書公派世譜	1993	F288-453-1~5
崔	艸溪	慶南 陝川郡草溪面	艸溪崔氏大同譜	1977	F288-420
崔	耽津	全南 康津郡	耽津崔氏諱烈公后族譜	1993	F288-009-1~4
崔	耽津	全南 康津郡	耽津崔氏通史	2001	F288-473
崔	和順	全南 和順郡	和順崔氏大同譜	1984	F288-366-1~7
崔			崔氏大同寶鑑	2000	F288-327-1~2
八					
夏	達城	大邱 達城郡	達城夏氏族譜	2004	F288-399-1~3
韓	清州	忠北 清州市	清州韓氏遺事寶鑑	1998	F288-482-1~2
韓	清州	忠北 清州市	清州韓氏文靖公派譜	1977	F288-526-1~10
許	陽川	京畿道金浦市陽村面	陽川許氏忠莊公派譜	1989	F288-540
洪	南陽	京畿道華城市南陽洞	南陽洪氏 福井世譜	2002	F288-552
黄	長水	全北 長水郡	長水黄氏世譜	2000	F288-427-1~12
黄	昌原(檜山)	慶南 昌原市	昌原(檜山)黄氏莊武公派譜	1995	F288-429-1~3
黄	昌原(檜山)	慶南 昌原市	昌原(檜山)黄氏世譜實録	1995	F288-430
黄			黄氏宗史寶鑑	2002	F288-484-1~2



## 新収資料 丸岡明「三田派・早稲田派 ―文壇早慶戦―」

村田 聡史（資料管理課）

図書館はこの夏、『改造文芸』1巻4号（昭和25年10月）に掲載された丸岡明著「三田派・早稲田派―文壇早慶戦―」の原稿をあらたに収蔵した。「文学界社箋」の400字詰原稿用紙17枚にわたって著されたものである。本人による修正は、例えば黒インクの傍線が該当部分の上にしっかりと引かれている様子などを見ると、文筆家によくありがちな乱筆ではなく非常に読みやすい。編集者によると思われる朱もほとんどなく、わずかに表題、章題、氏名の文字ポイント指定のみという、大変見映えの良いものである。ただし、本資料を特徴付けている副題「文壇早慶戦」もまた朱書きである点は、注意していいだろう。

この文章はそもそも、丹羽文雄と石坂洋二郎、井上友一郎と北原武夫、北條誠と柴田錬三郎という組合せを造つて、その人物と作品について書いてくれとのことであつた。

とあることから、出版社からの依頼をきっかけに執筆された原稿のようだが、序章の題にもなっている「ひとつの提案」は、具体的には「三田派」「早稲田派」という概念区分を提案し、戦後文学の展開に照応しようとする試みを指しており、非常に印象的である。何と言ってもこの「早稲田派」という表現からも、本学に関係の深い資料と考えてよいだろう。

丸岡明（明治40～昭和43年）は、暁星中学校から慶應義塾予科を経て、慶應義塾大学仏文科を卒業した小説家である。在学中に水上瀧太郎の知遇を得て、処女作「マダム・マルタンの涙」を『三田文学』（昭和5年2月）に発表し、佐佐木茂索、阿部知二、横光利一から評価を受けた。その後は堀辰雄に師事し、長編小説「生きものの記録」を『三田文学』（昭和10年10～12月）に執筆し、同時代の人々を心理主義的手法で描く作家としてその地位を築いていった。そして何よりも、戦後『三田文学』の復刊にあたり、その発起人として、太

田咲太郎、片山修三、柴田錬三郎、原民喜らを編集に従える中心的存在であったことは看過できないだろう。しかし、丸岡は云う。

三田派、早稲田派と云ふ風に考へると、今は早稲田派の黄金時代であらうか。中山、丹羽、石川、田村、井上君など、体格もなかなかよいし、なにしろよく書く連中が揃っている。そこへゆくと、三田派は兎角孤立して、一人一人仕事をしてゆく傾向がある。どうもさうした気質の者が多さうだ。それでは氣勢があがらぬから、十五日会の向ふをゆくやうな会合をやり度いと鈴木重雄君達は云っている。

三田文学界の重鎮である丸岡から、まさかというべきか「早稲田派」を賛美する発言である。こうした主張の背景となつた当時の社会状況とはいかなるものであつたか。それを理解するために、『読書倶楽部』4巻11号（昭和25年12月）に発表された「文壇・睡眠不足の一年 1949年の印象風景」というエッセイに目を転じると、丸岡はこう述べている。

今年は後半期になつて、日配問題などもあり、真面目な純文学雑誌が次々と発行中止になつた。「知識人」「表現」「世界文化」など、その例である。「早稲田文学」も出ていないし、「個性」も十一月で休刊になるらしい。鎌倉文庫も、解散するような噂である。

日配問題とは、戦時中日本の出版流通を独占していた国策取次会社「日本出版配給」が、戦後GHQによる経済民主化の一環で閉鎖指定を受け、活動を停止せざるをえなかったことを意味している。その影響は数多くの出版社に深刻なダメージを与え、まさに純文学にとっては厳冬の時代を迎えていた。

悪の花ばかりが栄えているわけではないが、読者層の浮遊しているこの激動期に、落ち着いた文学をつくらうとすることが無く、既に困難なのだろう。

という言葉はその切実な様子を物語っている。事実『三田文学』は昭和25年6月までひとまずの命脈を保ち続けていたが、『早稲田文学』は昭和24年9月を最後に第四次の刊行を終えている。たしかに『早稲田文学』の方が先に力尽きた。しかし、それにもかかわらず、毎月70余名の作家、ジャーナリスト、文学青年達が、有楽町のピアホール「レバンテ」で集会していたという「早稲田派」の開催する「十五日会」の意気盛んなこと。丸岡の目には、逼迫した状況の中でも文筆活動の拠点となりうる自立的結社として映じたに違いない。「早稲田派の総帥のやうな印象を受ける」最近の丹羽文雄に賛辞をおくるのも頷けることである。

では、「三田派」「早稲田派」の根底を形作っていたものは何か。丸岡は、前者に佐藤春夫『近代日本文学の展望』（昭和25年7月、大日本雄弁会講談社、慶應義塾での全6回の連続講義をまとめたもの）の提唱する「浪漫的自然主義」を、後者に正宗白鳥『自然主義盛衰史』（六興出版部、昭和24年11月）の提唱する「新自然主義(?)」（原文ママ）を挙げている。それぞれを象徴する人物として、佐藤はのちのロマンティズムに連なる森鷗外に、

白鳥は自然主義の源流というべき坪内逍遙に言及しているから、明治20年代の「逍鷗論争」いわゆる「没理想論争」の延長線に位置すべき争点とも解釈できるだろう。また、当時主流であった文芸誌『近代文学』と『新日本文学』のあいだで繰り広げられた「政治と文学」論争を尻目に、新しい文芸思潮の構図を提案しようと意図している点も、深く研究されるべき対象となるに違いない。

そのほかにも、丸岡は「従来の作家や作品を否定しようとする気構へがあつて、それが問題を取り上げる場合の角度の相違になつている」いわゆる戦後派と呼ばれる作家を評価する。椎名麟三、梅崎春生、三島由紀夫、武田泰淳、埴谷雄高、野間宏などが代表的人物である。『早稲田文学』や『三田文学』の諸氏を評価する場合でも、そうした新しい問題提起を目指そうとする姿勢が重要な基準となっているのだろう。

ふりかえれば、明治24年10月、坪内逍遙によって発行された『早稲田文学』はその後も、第二次の島村抱月、第三次の谷崎精二、と大家というべき人物が編集者の座にあつたため、戦後の第四次以降の展開はどうしても陰に隠れがちであった。しかし、丸岡の論考はそうした部分に一閃の光を差し込むような面白さをもっている。この資料がさらに取り上げられるようになることを期待したい。

## 展覧会報告（2008年11月～2009年12月）

### 図書館展示委員会

この1年間、学内外で図書館主催(一部共催)で複数の展覧会を開催した。以下、簡単にそれぞれの概要を報告する。

#### 1) 角田柳作展 ～学術情報の発信の歴史と未来～ 〈第10回図書館総合展 / 学術オープンサミット2008〉

会 期：2008年11月26日（水）～28日（金）

会 場：パシフィコ横浜 展示ホールB

関連行事：講演会「書物という架け橋～角田柳作と早稲田大学図書館～」(教育・総合科学学術院 和田敦彦教授、11月26日)

来場者数：展覧会813人、講演会43人。

図書館総合展は、内外の図書館関係者(機関)による、図書館運営にかかわる最新の技術、コンピュータ・システムなどを紹介する場としてよく知られているが、図書館、特に大学図書館が独自にブースを設け、活動内容を紹介するといった試みはなされていなかった。10回目を迎えるにあたり、主催者からの要望もあって、初めて図書館として正式に参加し、当館が進める館蔵資料に関する積極的な情報発信について紹介した。具体的には、2007年に早稲田で、2008年夏にコロンビア大学で開催した角田柳作展の主な資料のパネルと、古典籍総合データベースについての解説と利用方法、収載資料のパネルを展示、さらに会場にPCを設置し、来場者に古典籍DBの画面操作、プリントアウトなどを体験していただいた。

角田については前年の展覧会以来、日米両国の文化交流に力を尽くしたその姿を紹介してきたが、やはり知名度はいまだ高くはなかった。それでも展示をご覧になるにしたがい、その存在と功績に感銘を受けた方も多かったようである。

来場者の多くが図書館で実務に携わっている方が多いせいか、古典籍DBについての関心は高く、質問も相次いだ。特に、館蔵のすべての古典籍を対象としている点、精細画像を新規に撮影していること、またそれらの情報(書誌・画像)を原則としてアクセス制限をせずに、無料で公開してい

る点に驚きの声が多く聞かれた。学外者からの感想や意見を直接聞くことができたのは大きな収穫であった。来場者への「お土産用」として、ダウンロードした画像を使った絵葉書、ブックカバーをその場で印刷して配布したのだが、他館の関係者から「同様のものを作成したい」との声を複数いただくなど、こちらも大好評であった。

#### 2) 図書館企画展「群雄割拠!!」

～戦国の世から天下統一へ～

会 期：2009年3月25日(水)～4月16日(木)

会 場：総合学術情報センター2階展示室

近年、戦国時代がブームになっており、大河ドラマ「天地人」も好評だったようである。そうした世相にあわせ、企画した展示である。

応仁の乱から大坂夏の陣ころまでの資料を、ほぼ時代順に展示したが、この時代のものは古文書を中心として館蔵資料の中でも充実した分野の一つなので、かなり内容の濃い展示となった。具体的には、戦国武将の文書、軍記物、合戦絵図、さらには合戦を描いた錦絵などを展示したが、なか





でも多くの来場者の注目を集めたのが斎藤利三所用と伝わる「茶糸威二枚胴具足」である。10年ほど前の「館蔵資料でたどる日本の歴史」展以来の出陳となり、会期前後には複数の問合せを受けた。

会期を通じて来場者に恵まれ、開催期間が例年よりも短期間であったにもかかわらず、この時期としては異例の1,000人ほど入場者があった。また、会期最終日に教育学部の日本史関係の授業の一環として60名近くの学生たちが来場したが、その多くが時間を過ぎて熱心に資料に見入り、質問を投げかけてきてくれるなど、好評だった。

### 3) 東アジアの<近代>をみる

#### 岡松参太郎文書展

会 期：2009年4月21日(火)～4月29日(水)

会 場：総合学術情報センター2階展示室

主 催：早稲田大学図書館、

早稲田大学東アジア法研究所

岡松参太郎は戦前、台湾・満洲の植民地法制を立案し、京都帝国大学法科大学の設立にもたずさわった民法学者であり、その父甕谷(ようこく)は、中江兆民らが師事した著名な儒学者である。図書館が所蔵する「岡松参太郎文書」は、彼ら親子2代にわたるもので、東アジアにおける<近代>そのものを映し出す貴重な資料であり、2008年10月にその全容がマイクロフィルム版で刊行された。本展示は、その中から比較的状态が良く、特に重要なもののみを集めたもので、全体に資料の劣化が激しいものも多く、今後原本は非公開となるため、展示会に出陳する最後の機会と考えられる。かなり専門的な内容であり、かつ会期も短期間であることから、来場者数が心配されたが、予想以上に多くの方たちが来場し、この分野での研究が盛んであり、かつ公開が求められていた資料であることをあらためて知ることができた。

### 4) <日本近世文学会春季全国大会開催記念>

近世文藝の輝き—早稲田大学所蔵近世貴重書展—

会 期：2009年5月14日(木)～6月18日(木)

会 場：大隈記念タワー10階125記念室

主 催：日本近世文学会・早稲田大学図書館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

日本近世文学会の平成21年度春季全国大会が早

稲田大学で開催されたのを記念し、同学会と図書館、演劇博物館の共催で開催されたものである。創立以来、坪内逍遙、市島謙吉をはじめ、多くの人々の努力によって、図書館や演劇博物館には、数百万点に及ぶ和漢洋さまざまな資料が蔵されるようになった。とりわけ、文学、演劇、洋学など近世文藝全般にわたる古典籍等は、戦前からの収蔵品に、戦後も貴重書を加えて、国内有数のコレクションに発展してきている。そうした資料から貴重書を厳選し、展示したものである。学会関係者だけでなく、学生、学外の文学愛好者など多くの来場者に恵まれた。

### 5) <中古文学会春季大会記念>

「源氏物語の絵と注釈」展

会 期：2009年5月22日(金)～6月10日(水)

会 場：総合学術情報センター2階展示室

協 力：中野幸一(早稲田大学名誉教授)

2008年は、『源氏物語』が世に知られるようになってちょうど1000年という区切りの年にあたり、各地でさまざまなイベント、展示会が開催されたが、その余韻の中で『源氏物語』とその享受資料に関する資料の展示会を開催した。これは、中古文学会春季大会等に合わせたもので、早稲田大学図書館が新たに収蔵した九曜文庫を中心とした資料で構成した。九曜文庫は、源氏物語研究の泰斗である中野幸一先生(早稲田大学名誉教授)が蒐集されたもので、『源氏物語』やその研究、享受資料の写本や版本、さらには画帖、絵巻、錦絵などの絵画資料まで、学界注目の貴重な資料が揃っている。今回、先生のご厚意により館蔵とすることができたが、本展示はその最初のお披露目の機会となった。1000年前に成立した『源氏物語』が、多くの人々に愛されいかに読み継がれていったかを実感できる展示として好評だった。

### 6) <万葉集1250年記念>

万葉集～享け継がれるその思い～

会 期：2009年10月16日(金)～11月17日(火)

会 場：総合学術情報センター2階展示室

主 催：早稲田大学日本古典籍研究所・早稲田大学図書館

2009年は、『万葉集』に収められた歌で成立年の

わかっているもののうち、もっとも新しい歌ができてから1250年にあたる節目の年ということで、各地で様々な記念行事がおこなわれた。これにあわせ図書館でも、早稲田大学日本古典籍研究所との共催で『万葉集』をテーマとした展覧会を開催することとなった。

『万葉集』は、後の世の詩歌だけでなく、多方面の学問、芸術に影響を与えたが、時代、分野を超えて『万葉集』との接点を持っている資料は数多くある。そうした資料を通じて、日本文化史において『万葉集』の担った意義を広く認識していただく機会とする内容となった。

#### 7) 第11回図書館総合展／学術オープンサミット2009 明治の錦絵と写真～近代日本の情報発信～

会 期：2009年11月10日（火）～12日（木）

会 場：パシフィコ横浜 展示ホールB

昨年に引き続き「第11回図書館総合展／学術オープンサミット2009」において、図書館としてブースを設置、標記の展示をおこなった。展示内容は会場のある横浜の開港150年の記念の年ということで、館蔵資料の中から幕末から文明開化の時代にスポットをあて、錦絵新聞、彩色写真（横浜写真）など、当時の社会、文化を映し出す資料をご覧いただくこととした。ブースの大きさは昨年の約半

分であったが、入口近くの好位置を確保できたこと、錦絵を用いたポスターが効果的だったこともあって昨年と比べて約2.5倍の2009人の来場者があった。今回も会場にPCを設置し、古典籍DBに収載した錦絵新聞、彩色写真の画像をご覧いただき、絵葉書を差し上げたのだが、こちらも大好評だった。こうした形での図書館のPRも今後さらに重要になってこよう。

#### 8) 鴨川市・早稲田大学交流事業

早稲田大学図書館所蔵古写真展江戸・明治の幻景展  
会 期：2009年11月28日（土）～12月6日（日）

会 場：鴨川市立図書館 集会室

主 催：鴨川市・鴨川市教育委員会・早稲田大学

鴨川市に早稲田大学のセミナーハウスが建設された1997年から数年にわたり、図書館所蔵資料を同市の図書館で展示する交流事業をおこなったが、今回、同市からの申し入れを受け、久しぶりに展覧会を開催した。内容は、幕末・明治期の彩色写真（横浜写真）とそのアルバム、関連資料である。直前の横浜で図書館総合展に出陳したものを中心に約60点の写真を展示した。会期最初の週末には図書館から藤原が展示解説にゆき、翌週は現地の学芸員に解説を依頼した。来年度以降も継続しての開催を要望されているが、今後は文化推進部などとの連携のもと、図書館だけでなく学内諸機関の積極的な関与が期待される。

展覧会は図書館が主体的にかかわることのできる資料についての情報発信の場だと言える。多くの人にその存在を知ってもらいたい資料について、また図書館が利用者に知ってほしい情報を、見たくなる、知りたくなるように工夫して公開することが、現在の図書館には求められる。その一つの手段として、図書館員自らの手になる展覧会は重要な機会であり、今後もその意義をよく理解した上でかかわってゆく必要があろう。

（文責：藤原秀之）



## 浙江工商大学に「早稲田大学文庫」設置

藤原 秀之（資料管理課長）

去る1月11日、中国は浙江省杭州市にある浙江工商大学の日本語文化学院に、早稲田大学文庫が設置された。これは、当館から同学院に寄贈された図書約30,000冊の整理が完了し、上記の名称で公開されることとなったものである。ここでは、文庫設置にかかわる経緯について簡単に述べ、図書館における資料の再利用の可能性について記したい。

日本語文化学院は浙江工商大学に設置された日本語、日本文化・思想等の総合的な教育・研究のための機関であり、中国における日本研究の一大拠点として大変に充実している。

当館からの図書寄贈については、2005年11月、王宝平先生（日本語文化学院副院長：当時）が河野貴美子先生（一文専任講師：当時、現在は准教授）に伴われて来室されたことにはじまる。当時の金子課長、宇田川（ともに資料管理課）が対応、学院における日本語図書の充実を希望する王先生から図書、特に歴史・文学を中心とした人文科学分野の日本語文献を寄贈して欲しいとの申し出があり、それを受け、資料管理課内（金子、宇田川、藤原）で具体的な送付内容、方法について相談、寄贈用図書データベース収録の当該分野の図書に加え、高田図書館から移された重複図書等を中心に寄贈することとし、宇田川と王先生との間でやり取りし、翌2006年6月、早稲田から浙江にむけて図書を送った。総数和洋あわせて28,376冊（772箱）。これについてはすでに本誌76号で報告したが、これだけ大規模の他機関宛の寄贈は今日に至るまで他に例を見ない。

寄贈から3年半、送ったことすら忘れかけた昨年11月、王先生から「寄贈してもらった本の整理が完了し、『早稲田大学文庫』として公開することになった。開庫式に参加して欲しい」との連絡があった。これまで多くの機関に図書を寄贈したが、こうした文庫扱いとなるのは、1999年にドイツのエルフルト大学に日本史関係の図書を寄贈したときくらいで、あまり例がない。招待に応じ、加藤館長と2人で現地に向かったのは年明け間

もない1月9日のことだった。大学は主要な機能を杭州市内から少し離れた下沙地区に移転しており、日本語学院も広大なキャンパスの中に独立した建物を有していた。

当日は入口に開庫式挙手の横断幕、さらには学院の学生30名ほどが並んで待っており、大型のディスプレイで開庫式開催を告げるなど、大ごとになっている。書庫は入口近くにあり、早稲田から寄贈した約3万冊の図書、いずれも学内にあっては全く役に立てることができずにいたものが、整然と整理され、真新しい書架に並べられた姿は、実に感慨深いものがあった。室内には、日本の他機関から寄贈された別の「文庫」もあったが、本学からの寄贈分が質・量ともに群を抜いている。

開庫式は現在は学院長となっている王宝平先生の司会で、張仁寿先生（大学副校長）、加藤館長、寄贈を仲介してくださった河野貴美子先生の挨拶があり、最後に張先生から加藤館長に受贈の証書が贈られた。先方は今回の寄贈を大変に喜んでおり、今後学生、教員たちの活用が多いに期待される。



早稲田大学文庫を背に王宝平先生と加藤館長

今回の文庫設置は、これまで図書館が進めてきた学外諸機関への図書寄贈という方針に誤りがなかったことの証左とも言え、今後も同様なケースには積極的に対応してゆきたい。今回の訪問にあたり、学院の王宝平院長、丁之群さんには大変にお世話になった。また、河野先生には極寒の北京から開庫式に合わせて来杭していただいた。あらためて謝意を申し述べたい。



## 知られざる図書館員 三木武吉

藤原 秀之 (資料管理課長)

早稲田大学の歴史はそのまま早稲田大学図書館の歴史である。そして早稲田大学図書館の歴史はそのまま早稲田大学図書館員の歴史でもある。2010年、創立から128年目を迎えた今この時まで、多くの図書館員が集まり散じていったことになる。その中には誰もが知っている有名人が図書館に勤めていたことがある。かつて本誌でも「しられざる図書館員」として童話作家坪田譲治を取り上げたことがあった。(『ふみくら』12号、1987年)掲載から20年以上が経過し、すでにそのことも歴史の一ページとなり忘れ去られているのではないだろうか。そこには次のように記されている。

本館に残された館員坪田譲治に関する唯一の記事と思われる大正六年十月二十二日の『事務日誌』に依れば、「洋書整理部員として坪田譲治雇入の事に内決す 但給料未定」と記されている。(中略)坪田が後年自編の年譜で、「本が思う存分読めるとして楽しみにして行って見たが、余り沢山の事で、目うつりがして、却って読めなかった」と追想しているように、その当時としては少なからぬ蔵書数を持つ図書館ではあったが、多感な作家坪田にとって安住の地とは成り得ず、僅か五カ月程で退職するに至った。

90歳を超える長寿を保った坪田であったが、その人生、あるいは創作活動に、青年期の図書館での生活、ほんの5ヶ月の生活が何らかの影響を与えたのか、それは定かではないが、しかし館蔵資料の何処かに、彼の足跡が残っているだろう事は確かである。

さて、本稿でとりあげる図書館員は、政治家・三木武吉である。戦後55年体制の礎を築き、のちの自民党の長期政権の礎を築いた彼に、早稲田大学図書館での勤務経験があったことを知る人はそう多くはないだろう。

三木武吉(みき ぶきち、1884～1956)。香川県高松市の生まれで、東京専門学校邦語法律科に進学したのは1901年のことであった。その前後を見ると、永井柳太郎、石橋湛山、中野正剛ら日本政治史を彩る多彩な面々がいる。在学中の1902年に早稲田大学と改称さ

れ、1904年に大学を卒業、その後弁護士等を経て1917年に衆議院議員に憲政会から立候補し、初当選した。自ら重要ポストにつくことはなかったが、1955年の自由民主党結成にいたる過程では中心となって行動したことはよく知られている。後に記すように、図書館に勤めたのは大学を出た直後のことであつたらしい。

彼のことを記した伝記は複数刊行されており、図書館勤めのことも記されている。そこには三木が市島謙吉にその力量を買われ、「こうして三木は図書館設立に一役買うことになつたが、少し誇張していえば早稲田大学の図書館は三木の卒直(マ)さが設立を早めたといつてもよからう」(三木会刊『三木武吉』、1958年)とか、「彼の与えられた役目は紹介状をもらって名士や大学の先輩を訪問し、書籍の寄贈を受けたり、諸先生の希望する新刊書、古本を買い集めたり、その索引表をつくったり、兎に角新しい図書館の建造なるまでは小使兼館長という一人十役ぐらいをかねていた」(重森久治『生きた政治史 三木武吉太閤記』、春陽堂、1956年)とあるが、さすがにこれは誇張である。そもそも彼が卒業したとき、すでに新しい図書館は開館していた(1902年開館)。それでは実際には三木はどんな仕事をしていたのだろうか。いくつかの記録から検証してみよう。

彼について記された図書館の記録には次のようなものがある。

『春城日誌』明治37年9月10日条

(前略) 校友三木某、田中唯の添書を齎し来訪。

『館長日誌』明治37年9月12日条

一、校友三木武吉、当分写字之為め本館へ備入るゝ事とセリ

『同上』明治37年9月13日条

一、川田家図書閲覧ニ供すべき分の目録謄写成る。依つて分類を取調べ、三木武吉の手にて「カード」を書き始む。

『同上』明治37年9月14日条

一、川田家より手伝ニ来り居る山田市郎を写字生として採用致し呉るゝ様、杉山令吉氏より横井時冬氏を経て申込あり。右ニ付、三

木の身上片付候上ハ、月給六円にて備入るゝ事に略々承諾之旨返答をなす。

『同上』明治37年10月26日条

- 一、三木担当之蔵経細目、不日出来之筈につき、其上は引続き左之細目を調整すべき事

粵雅堂叢書

太平御覧 総部類丈にてよろし

右館蔵

知不足齋叢書

史 餘

右川田図書

『同上』明治37年10月27日条

- 一、三木担当之大蔵経細目カード出来す。カード函三個ニ満ツ。

『同上』明治37年11月5日条

- 一、三木武吉ニ役者評判記之細目を作することを命す。

「当分写字之為め」に雇われ、「身上片付」くまでの短期採用であったことから、伝記にあるような「小使兼館長」でないことはあきらかである。ただ写字生として、大蔵経のカードを取り終えると引続き役者評判記のカード作成に取り掛かっているところを見ると、真面目に働いていたのであろう。コツコツと一枚一枚カードをとっている姿からは、のちに「政界の策士」と評された三木の、実直な一面をうかがい知ることができる。

図書館と三木とのつながりは実はそれ以後もあることがわかった。特別資料室に残されている各種の記録を見ていたとき、「故 三木武吉氏旧蔵漢籍寄贈リスト」を発見した。115部559冊の資料が三木から寄贈されたことになっている。内容を見ると、漢籍だけでなく和書もかなり含まれており、一部の資料は受け入れられていることが確認できたが、寄贈の時期については現物からもわからなかった。

現在、中央図書館では利用者用のカード目録がほぼ撤去された状態にある。目録はすべてオンライン目録(WINE)で検索してください、とは20年前には考えられなかった事態である。では三木の書いたカードもすっかり無くなってしまったのかというと、そうとも言いきれない。古書、貴重書を扱う特別資料室では現在もカード目録が継続しており、古い時期の業務用カードのうち廃棄せずに残したものがある。その中に、前述の『館長日誌』に三木が担当したとされていた「粵雅堂

叢書」のカードがある。カードには「銭恂氏寄」とあり、図書本体にも「支那銭恂所有」とあることから、清国末期の外交官である銭恂から寄贈されたものとわかる。銭恂は1898年に留学生を率いて本学にやってきているが、その後、東京専門学校が早稲田大学へとかわる直前の1901、1902の両年、架蔵の図書(漢籍)約4,000冊を寄贈してくれている。銭恂やその寄贈図書については高木理久夫氏の論考に詳しい。現在残っているカードを見ると、メインのカードと細目が同筆と思われるので、あるいは三木の手になるものとは別のものかもしれない。ただ本書が寄贈されたのが1902年、三木が図書館に勤めていたのが1904年なので、三木がとったのは本書のカードであったことは間違いないだろう。だとすれば本書は、清国末期の外交官・銭恂のもとから当館に寄せられ、そこで戦後日本の道筋を決めた政治家の一人である三木武吉の手でカードが作られ、公開されるに至ったことになる。なんとも不思議な縁だといえよう。そのカードも、今では利用者の目に触れることはなくなっているが、しかしその成果がWINEのデータにいかされているだけでなく、後の関連文献の収書にも活用されていたことは間違いない。さらに彼の寄贈図書が今も図書館で多くの利用者に提供されていることを、本人はどんな気持ちで見守っているだろうか。

図書館の蔵書検索ツールからカードがほぼ消え去った今日、一枚のカードの記述、それは図書だけでなく、それを書いた人物の表情をあらわすこともある。もちろん、利用者にとっては、どうでもいいこと、かもしれない。しかし、そうした仕事の一つ一つが今につながっていることを、図書館の後輩である我々図書館員だけでも胸に刻んでおく必要がある。

## <参考文献>

高木理久夫「銭恂と早稲田大学図書館」(『ふみくら』76)

同「早稲田大学開校期における銭恂の寄贈図書について」(『早稲田大学図書館紀要』55)

同「銭恂年譜」(『早稲田大学図書館紀要』56)

早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』2、5(1981、1997年、早稲田大学出版部)

市島春城『春城日誌』明治37年(市島春城資料、14 1919 541) 古典籍総合データベース参照。

市島春城『館長日誌』明治37年(市島春城資料、14 1919 924) 古典籍総合データベース参照。

## 電子資料の導入状況

今村 昭一（図書館調査役）

図書館は、大学の教育・研究を支える学術情報基盤の要として、電子媒体の資料（電子資料）の導入に努めてきた。

現在、本学で利用できる電子資料は、電子ジャーナルで18,000タイトルを超え、電子ブックでは約340,000タイトルにのぼる。

この数字は、平成20年度「学術情報基盤実態調査」（文部科学省）によれば、電子ジャーナルのタイトル数に限定した話にはなるが、国・公・私立大学の平均値がそれぞれ平成19年度の7,267・1,348・2,393であることに比して高い水準にあるといえる。また、これらのタイトルの多くが蔵書検索システム（WINE）で検索できるということも本学の図書館システムの利点である。

電子資料にはその規模だけではなく、様々な種類のものがある。いくつもの分類方法があることを承知のうえで、本学が導入している電子資料を大別すると以下のようなになる。

1. 電子ジャーナル：ScienceDirect（Elsevier）、SpringerLINKなど
2. 電子ブック：NetLibrary, Early English Books Online（EEBO）など
3. 各種索引・抄録：Web of Science, MathScinetなど
4. 数値データベース：eol, IFS Onlineなど
5. 人名録・辞書・事典：Oxford Dictionary of National Biography, OED Onlineなど

その他、朝日新聞記事データベースの「聞蔵Ⅱビジュアル」や「日本大百科全書」をはじめ事典や辞書を中心とした総合データベースである「JapanKnowledge+NR」、 「lexis.com」などの法律系のデータベースほか、最近ではクラシック音楽を中心とするストリーミング再生による楽曲配信サービスである「ナクソス・ミュージック・ライブラリー」の提供を始めるなど、文字情報や数値情報にとどまらない。

また、導入履歴からサービスの提供を開始した年別にコンテンツ数をみると、2001年以降、以下のとおりである。

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
数	12	7	10	32	19	20	24	22

上記の数字は全学で利用可能なものに限定したもので、これらは中央図書館・キャンパス図書館のみならず、各箇所を導入したものも含んでいる。

なお、ここには既に導入している電子ジャーナルのバックファイルやコンテンツの一部も含まれているが、2004年をピークとして、2005年以降は20件前後の電子資料が新規に導入されている。ある統計によれば、2003年において既に学術雑誌の約75%がオンラインで入手可能となっていることから、2004年に電子資料が本格的に導入され始めたことも理解できる。

データベース・電子ジャーナルと言うと、自然科学系のものに目が行きがちであるが、本学では、比較的早い時期から社会科学系のデータベースを導入している。例えば、2000年10月にはOECD刊行の図書・雑誌全文と統計情報のパッケージである「SourceOECD」を導入した。

また、2000年4月に「朝日新聞DNA」（現在の「聞蔵Ⅱビジュアル」）を、2001年4月には「日経テレコン21」のサービスを開始するなど、日本の新聞のオンライン・データベースも早期に導入した。そして長らく希望があった読売新聞の記事データベースについても、「ヨミダス歴史館」として明治7年（1874）の創刊から昭和64年（1989）までの読売新聞紙面と昭和61年（1986）からの読売新聞記事を合わせて利用できることになったことから、2009年度に導入することとなった。

当初は索引・抄録など二次情報データベースの比重も高かった電子資料であるが、その後Googleなどが普及したこともあり、全文まで読めることが利用する側にとっては普通のことになっている。そのため、新規に導入するデータベースについて



は全文が利用できるものを中心である。

また、最近では、バックファイルの整備や電子ブックについても、有用性を十分に検討したうえ、その充実に努めている。とはいえ、これらのデータベース・電子ジャーナルの導入・継続には、時として多額の支出がともなう。2008年度の資料費（中央図書館、キャンパス図書館、教員図書室・研究所図書室、学生読書室、学院・本庄学院図書室を含む）の総計約12億2千万円のうち、データベース資料費の総額は概算で5億円を超えると見積もることができる。総資料費の40%強をデータベース・電子ジャーナル等電子資料に充てていることになる。限られた予算の中では、ものによっては紙媒体あるいは代替対象となるCD-ROM等から、電子媒体で利用できるものはそちらにシフトすることとして、紙媒体等での継続購入を中止するという判断も必要になってくる。ここまで費用をかけて電子資料を導入しているのは、いうまでもなく、その利便性があるからなのだが、この傾向は今後とも強まっていくことと思われる。

研究者の立場からも、『学術情報の取得動向と電子ジャーナルの利用度に関する調査（電子ジャーナル等の利用動向調査2007）』<sup>1)</sup>によれば、「電子ジャーナルなしではわが国の学術研究は成り立たない」と結論づけられている。

## 今後の課題

以上、電子資料の導入概況をみてきたが、サービスを提供する側としていくつかの課題がある。

本学で契約しているデータベース・電子ジャーナル・電子ブック等を紹介するため、また、種々の情報の探し方をサポートするために「学術情報検索」<sup>2)</sup>のサービスを提供しているが、これをより使いやすいシステムに改善していくことが必要である。具体的に言うと、初めてこのページを訪れる人にとっては何がどのように利用できるのか、今のシステムでは分かりにくいという声があるという。この点、サービス開始当初の担当者として反省しなければならないが、今後は、担当箇所が

中心となり、よりよいサービスをめざして改善を検討していきたい。

また、電子資料、とくにデータベースのパッケージは、常時コンテンツが増減する可能性を持っている。そのため、図書館員としては契約（更新）時のみならず、常に利用者に何を利用できるのかコンテンツを明示できることが大切である。

それに関連して、電子ジャーナルについては書誌データを購入しているが、電子ブックに関してはベンダーから独自に提供されている書誌データを図書館システムに取り込むケースが多い。今後は電子ブックについても書誌データを迅速に取り込むなど、WINE検索の利便性を高めていきたい。

管理面からは、契約している電子資料の数が多くなってきたということがある。電子資料を管理するためシステム、いわばデータベースのデータベースが必要になってきている。システム的な対応としては、既にElectronic Resource Management (ERM)を導入しており、データベース・電子ジャーナル等の概要だけでなく、契約の諸条件、コンタクト先の情報など多岐に渡る情報を入力しているが、今後、本格的に活用していくことが必要であろう。

一方、日本語の電子資料は、海外のそれと比較して、まだまだと思われるところもある。例えば、利用統計がとれないデータベースがある。これから導入する、または導入したデータベースがどのくらい使われているのかトライアル時および導入後にわからないと数値的には評価できない。

あるいは、利用回数等に応じて支払うべき金額が決まってくる従量制であるため、導入するにあたっては「敷居が高い」データベースも、まだ、かなりの数ある。

大学図書館として利用者にサービスを提供するにあたり、望ましい電子資料のあり方についてベンダーに提案していくことも図書館員に望まれることだと思う。

1) [http://www.screal.org/apache2-default/Publications/SCREAL\\_REPORT\\_jpn8.pdf](http://www.screal.org/apache2-default/Publications/SCREAL_REPORT_jpn8.pdf)

2) <http://www.wul.waseda.ac.jp/imas/>

## 図書館ホームページ（日・英）のリニューアル

外山 智信（情報管理課）

2008年11月26日に図書館ホームページの日本語版が、ついで2009年5月19日に英語版がそれぞれリニューアルされ、公開された。本稿では、日本語版、英語版それぞれの特徴、改善点について報告する。

### ■日本語版について

大きな特徴は主として3点ある。まず、旧来のホームページと比較して、利用者の視点から、利用者が望むと思われる、様々な資料、学術情報にアクセスしやすいように改善した。具体的にはトップページに簡易検索ウィンドウを設け、「WINE (OPAC)」、「学術情報検索（データベース）」、「電子ジャーナル」の3タイプの学術情報につき検索できるようにした。これにより、利用者の資料検索に伴う時間を減らすことが出来たと考えている。

次にガイド機能を強化したことが挙げられる。旧来はサイトの構成上の問題もあり、利用者の研究、学習の支援という点で、情報量が多くは無かった。今回、新たに「リサーチNAVI」、「ガイド&チュートリアル」という項目をそれぞれ設け、本学図書館が長年に渡り蓄積してきた図書館リテラシーのノウハウを集約し、発信した。更には「Q&A」を設け、過去において、利用者から寄せられた様々な質問の他、オンラインレファレンスで受け付けた相談を「レファレンス事例集」とし

て載せることにより、利用者の情報リテラシー、利便性の向上を図った。

そして3点目は、図書館情報を一元化し、これまでバラツキがあった各図書館・図書室のページのスタイルや内容を統一した。これにより異なるキャンパスで研究、学習をする利用者の目的に合った、図書館利用のサポートをすることが出来るようになった。

### ■英語版について

英語版の最大の特徴は、旧来と比較し、英語ページの量が大幅に増えたことである。ホームページ上部の「日本語」、「English」の切り替えボタンをクリックすることにより、原則として日本語と英語が対になるように、英語ページを作成した。ページの作成段階で、欧米の大学図書館のホームページ、および関連する論文、資料を参考に、いわゆる図書館専門用語、略語は極力使用せず、日本語、英語、ともに母国語としない利用者にとって、分かりやすい平易な英語を使用するように努めた。その際に、以前は使用する単語にバラツキがあったので、統一し、利用者が混乱しないように心がけた。

### ■今後について

以上の点において、図書館ホームページは大きく生まれ変わった。利用者の図書館利用、研究活動の一助となることを期待したい。ホームページをリニューアル、公開したからと言って、それで全てが終わるわけではない。情報は常に新しくなり、利用者が求めるものも絶えず変化し続けている。今後は、系統的に各担当箇所での情報を更新できるようにもなったので、各担当箇所の責任のもと、利用者のニーズにあった情報を提供して行くことが必要である。



(リニューアルされた図書館ホームページ)  
<http://www.wul.waseda.ac.jp/index-j.html>

# オンライン紹介状申し込みのサービス

御園 和之（利用者支援課）

利用したい資料が早稲田大学図書館に所蔵されていない場合は、他大学・研究機関の図書館に向いて閲覧することができますが、多くの場合、紹介状が必要となります。

なお、一部の国公立大学図書館や図書館協定校<慶應義塾大学・同志社大学・一橋大学>の図書館については学生証・教職員証での入館が可能です。図書館協定校の詳細については「図書館協定校の図書館利用について」<sup>1)</sup>をご覧ください。

利用者支援課では、非来館型サービスの一つとして、学部学生・大学院学生・教職員（非常勤講師、助教、助手を含む）の方々を対象に、2008年12月10日からオンラインによる紹介状申し込みのサービスを開始しました。

## ・オンライン紹介状申し込みのメリット①

通常は、訪問先の大学等に、利用希望の資料名や訪問希望日等を連絡し、許可を得ない限り紹介状を発行することができません。そのため、従来は、紹介状の「申し込み時」と「受け取り時」で、少なくとも二回はレファレンスカウンターにおいていただく必要がありました。しかし、本サービスによって「申し込み時」は、ご来館いただく必要がなくなりました。また、専任教員の方につきましては、紹介状の「受け取り」についても、研究室宛の送付サービスを開始いたしました。なお、貴重書の閲覧など、資料によっては、何度かご来館いただく必要のある場合もありますのでご了承ください。

## ・オンライン紹介状申し込みのメリット②

従来は、紹介状の「受け取り時」に、利用希望資料名などをご自身で紹介状にご記入いただいていたのですが、オンラインでお申し込みいただいた場合は、申し込み時のデータを利用して紹介状を作成することができますので、すぐに紹介状をお渡しすることができるようになりました。

## ・オンライン紹介状申し込みをご利用いただくには

Waseda-net portalのシステムサービス-申請フォーム入力から、「図書館（中央図書館）紹介状申し込み」をお選びください。訪問先が国内の場合は、利用を希望する資料名、訪問先、日程をご記入ください。資料についてはNACSIS Webcatにデータのあるものについては、コード番号をご記入ください。発行までには、通常2日～4日必要となりますので、余裕をもってお申し込みください。

## ・海外の図書館等に対する紹介状について

海外の図書館等向けの紹介状も発行しております。ただし、海外では、国内のように決まった紹介状制度があるわけではありませぬので、訪問先の図書館に入館するには何が必要かを、事前にご自身で十分調査してください。申請フォームには、訪問希望先(ホームページがある場合は、そのURLも)、ご自身の専門分野等をご記入ください。なお、図書館長の決済が必要となるため、即日の発行はできませんので、余裕をもってお申し込みください。

申請にあたっては、各申請フォームにある注意書をよくお読みください。図書館ホームページ「学外図書館の訪問利用（学内者対象）」<sup>2)</sup>「紹介状申し込みのご利用方法」<sup>3)</sup>も併せてご覧ください。

■注 いずれも、早稲田大学図書館ホームページ

1) 「図書館協定校の図書館利用」

<http://www.wul.waseda.ac.jp/Services/kyoutei.html>

2) 「学外図書館の訪問利用（学内者対象）」

[http://www.wul.waseda.ac.jp/Services/non-waseda\\_visit.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/Services/non-waseda_visit.html)

3) 「紹介状申し込みのご利用方法」

[http://www.wul.waseda.ac.jp/Services/online-request\\_shoukaijou.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/Services/online-request_shoukaijou.html)





## 図書館だより

### 2008～2009年度 図書館日誌 (中央図書館)

#### 2008年度

- 4. 1 入学式につき図書館を開放
- 4. 15 アラブイスラーム学院(サウジアラビア)図書館長来訪
- 4. 24 河南師範大学(中国)副学長一行来訪
- 5. 23 貴州省(中国)大学関係者一行来訪
- 6. 3 安養高等学校(韓国)生徒来訪
- 6. 10 図書館協議委員会(第1回)
- 7. 2 ノースカロライナ大学(アメリカ)大学院生来訪
- 7. 2 広東省(中国)研修団来訪
- 7. 15 復旦大学(中国)一行来訪
- 7. 22 夏季長期貸出(9.21まで)
- 7. 28 電子媒体検討委員会(第1回)
- 7. 29 ラチャモンコン・クレンテープ大学(タイ)一行来訪
- 7. 30 西早稲田中学校職業体験(8.1まで)
- 8. 1 夏季休業期間につき開館時間短縮(9.20まで)
- 8. 1 オープンキャンパスにつき図書館を開放(8.3まで)
- 8. 20 全北大学校(韓国)一行来訪
- 8. 26 行政院農業委員会(台湾)一行来訪
- 9. 8 慶應義塾大学、立教大学実習生研修(各2名、9.19まで)
- 9. 12 マルクブロック大学(フランス)副学長来訪
- 10.26 ホームカミングデーにつき図書館を開放
- 11. 4 河南理工大学(中国)一行来訪
- 11. 5 図書館協議委員会(第2回)
- 11.26 図書館ホームページ(日本語)リニューアル
- 12. 8 武漢省教育関係者(中国)一行来訪
- 12.15 電子媒体検討委員会(第2回)
- 12.16 図書館協議委員会(第3回)
- 12.24 冬季休業期間につき開館時間短縮(1.7まで)
- 1. 23 電子媒体検討委員会(第3回)
- 2. 4 図書館協議委員会(第4回)
- 2. 10 北京師範大学珠海分校(中国)一行来訪
- 2. 12 入試期間につき開館時間短縮(2.21まで)
- 2. 17 尚絅大学司書課程一行来訪
- 3. 10 トロント大学図書館日本関係ライブラリアン来訪
- 3. 23 図書館学習支援連携委員会(第1回)
- 3. 25 卒業式につき図書館を開放

#### 2009年度(12月まで)

- 4. 1 入学式につき図書館を開放
- 4. 14 上海大学文学院教授一行来訪
- 5. 13 図書館学習支援連携委員会(第2回)
- 5. 19 図書館ホームページ(英語)リニューアル
- 6. 25 那須高原海城高等学校一行来訪
- 6. 26 図書館協議委員会(第1回)
- 7. 6 東京都私立中学高等学校協会東京私学教育研究所学校図書館研究会一行来訪
- 7. 15 図書館学習支援連携委員会(第3回)
- 7. 21 夏季長期貸出(9.18まで)
- 7. 23 福島県立福島高等学校図書部一行来訪
- 7. 27 西早稲田中学校職業体験(7.29まで)
- 7. 28 電子媒体検討委員会(第1回)
- 8. 1 夏季休業期間につき開館時間短縮(9.20まで)
- 8. 1 オープンキャンパスにつき図書館を開放(8.3まで)
- 8. 5 昭和女子大学司書課程一行来訪
- 8. 19 群馬県高等学校教育研究会図書館部会一行来訪
- 8. 20 東邦大学付属東邦高等学校図書委員会一行来訪
- 8. 27 湖南省行政学院大学訪日視察団一行来訪
- 8. 28 東京都高等学校国語教育研究会研究部一行来訪
- 9. 7 慶應義塾大学実習生研修(2名、9.18まで)
- 9. 30 図書館学習支援連携委員会(第4回)
- 10. 7 広島県立府中高等学校生徒一行来訪
- 10.16 韓国私立大学図書館協会(KPULA)一行来訪
- 10.18 ホームカミングデーにつき図書館を開放
- 10.19 KACST(King Abdul Aziz City for Science and Technology)(サウジアラビア)会長来訪
- 11. 5 図書館協議委員会(第2回)
- 11.12 セントラルアリゾナカレッジ(アメリカ)司書来訪
- 11.19 パフチェシェヒル大学(トルコ)研修団来訪
- 12.11 電子媒体検討委員会(第2回)
- 12.15 図書館協議委員会(第3回)
- 12.24 冬期休業期間につき開館時間短縮(1/5まで)

早稲田大学図書館報 ふみくら No. 78 2010年3月15日発行 3,000部  
 発行人/加藤哲夫  
 担当課長/藤原秀之 編集委員会/小井戸みつる・鈴木努  
 発行/早稲田大学図書館 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 ☎03-5286-1652

ISSN 0289-8926